第一部用

三卷

東京
光風館藏版

42624
教科書文庫
4
810
51-1931
20000
39186

教科書文庫
4
810
51-1931
2000039186

文部省檢定濟
昭和六年二月四日　師範學校國語科教科用

師範國文

第一部用

卷三

吉田彌平編

東京　光風館藏版

広島大学図書
2000039186

375.9
Y019
資料室

凱風快晴　（葛飾北齋筆）

廣島大學圖書之印

廣島大学
教
39186
図書

師範國文 第一部用 卷三

目次

一 吉野山……藤岡作太郎 一
二 菅笠日記……本居宣長 六
三 村上義光……〔太平記〕 一三
四 深山椿……夏目漱石 一七
五 葵……二三
六 蛙……長塚節 二五
七 燕……薄田泣菫 三三

八　小泉八雲の舊栖……厨川白村　四一
九　松江の曉……落合貞三郎　五一
一〇　世の中……五七
一一　仁和寺……兼好法師　五九
先達……五九
醉興……六〇
最明寺入道……六三
日野資朝卿……六三
一二　求め得る日……阿部次郎　六四
一三　富士の靈……野口米次郎　六七
一四　國のしづめ……七三

一五　武士道……山路愛山　七五
一六　ハンニバル……矢野龍溪　八四
一七　アルプスの夏……槇有恆　九二
一八　登臨賦……島崎藤村　一〇〇
一九　童心……北原白秋　一〇四
二〇　幼兒……小林一茶　一一〇
二一　兒なくらむ……一一三
二二　戲作三昧……芥川龍之介　一一六
二三　芳流閣……瀧澤馬琴　一二六
二四　長柄堤の訣別……坪內逍遙　一三三
二五　妹にさとす……吉田松陰　一四八

目次

二六　偉人……嘉納治五郎　一五六

終

帝國大學圖書之印

藤岡作太郎
國文學者
東圃と號す
東京帝國大學文科大學助教授
文學博士
石川縣金澤市生
明治四十三年歿
年四十一

師範國文　第一部用　卷三

一　吉野山

藤岡作太郎

景色よき地には歴史上のゆかしさなく、歴史上にゆかしき地には景色に風情なきものゝ世には多かるに、景色と歴史とを兼ね備ふる、これ吉野が天下無雙の名區たる所以なるべし。抑、大和は人皇以來最も古く開けし國なれば、從つて此の地も山間の僻地ながら、よく世に知られけらし。南和及び紀伊は木材に富みたる處、それを都に運ぶには、先づ此の地に集めけん。年々に大宮に參りて毛の荒物、毛の和物を貢ぎける國栖といふ山人も、此

ダイズ・デンシュウ
飛鳥淨御原の帝　天武天皇

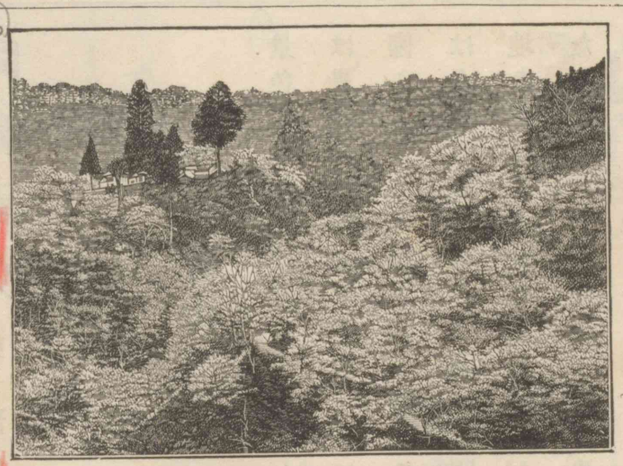
ンデ・ヒルガエス
五節の舞　昔は毎年新嘗祭に行つた舞　今は御即位禮の大嘗會に行ふ

ナグサメル
袖振山　吉野の里にある山

カツラギ
大峰　吉野山の奥二十四粁にある山上ヶ嶽山伏行者の峰入した處

ジライ
役行者　名は小角　文武帝の頃の人

サンケイ
聖寶僧正　延喜九年（一五六九）寂　年七十八



のあたりにや住みけん。

飛鳥淨御原の帝のこゝの宮にして日暮、琴を彈じ給ひしに、前岫忽ち雲起り、神女天降りて、袖を飜し歌ひ舞ひて大御心を慰め奉りき

吉野山

といふ五節の舞の起原は、袖振山にその名を留めたり。葛城の神を役して大峰を開きたりといふ役行者は熊野よりわけ入り、醍醐寺の開祖たる聖寶僧正は、こゝより大峰に分けいりしなるべし。

爾來大峰を奥院とし、吉野を本院として、參詣する者跡を絶たず、

ウラミ
チョウシン
シツイ　ラクタン

金峰山寺　吉野の藏王堂

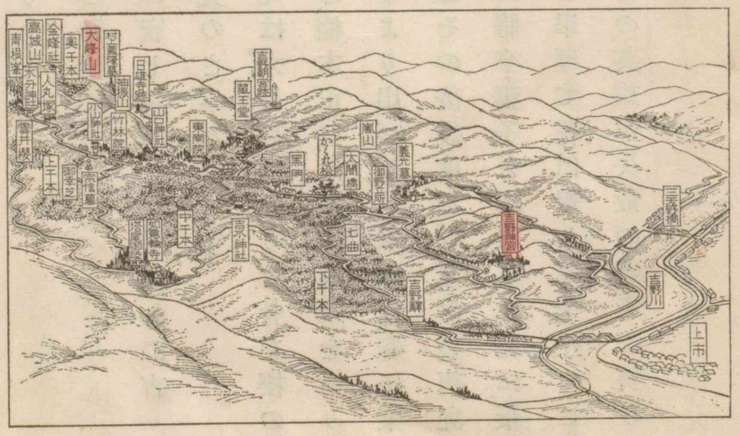
源廷尉　檢非遣使尉源義經

兄　佐藤繼信

弟　佐藤忠信

金峰山寺の山僧は南都・北嶺と肩を比べぬ。

源廷尉が昨日にかはる今日の恨、屋島に寵臣の兄を失ひしは、痛ましけれど勝利に誇りし時なり、今その弟を失ふ、失意落膽の時、英雄の涙そも如何なりけん。その後數世、建武中興の政亂れて、吉野朝五十七年、かゝる山中を都と定めたまひけるよ。花咲き花散るとき、聖帝の思、月盈ち月虧くるとき、百官の涙。かゝるあはれは古に



吉野附近

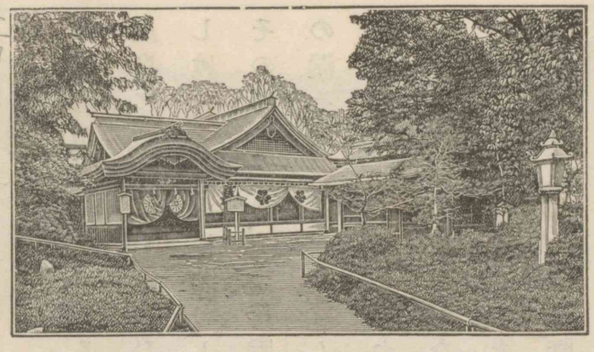
サビー、
ダイトウ
ソウモクムジョウ
ケウジ
ホウタイコウ
ゴウユウ
サガミ
アト
ハク

延元帝
後醍醐天皇

天台座主
長承四年（一七九五）寂
年七十九

行尊

見ざるところ、後の世にもまた有りなんや。



吉水神社

延元帝の御製に、

都だに寂しかりしを雲はれぬ吉野の奥のさみだれの空

村上義光は大塔宮に代りて骨を櫻の陰に埋め、楠木正行は君に名残を惜みて雲の中より出づ。草木無情、春に榮ゆることその後幾度ぞ。運命の寵兒豐太閤は、將卒・妻子を率ゐて此處に豪遊し、盃を擧げて花に對し氣を吐くこと千丈、古の英雄が失敗の迹をや笑ひけん。

モウゴ・ソシリ
ショウオウ
スゲガサ
キユウセキ

花より外に
もろともにあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし（金葉集）

やがて出でじ
吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん
（新古今集）

益軒が筆
貝原益軒の和州巡覽記

鈴の屋
本居宣長の號

貞室
俳人
安原氏
延寶元年（一六七三）歿
年六十四

支考
俳人
各務氏
享保十六年（一七三一）歿
年六十七

大僧正行尊は「花より外に知る人もなし」と知己の得難きを恨み、西行法師は「やがて出でじと思ふ身を」といひて妄語の誹をや得けん。獨り天下の名所を探る蕉翁が風流、母に侍して一生の望足れりとする山陽が孝行。その名所を記すること質にして要を得たるは益軒が筆、鈴の屋が菅笠日記なども永く人に忘られざらん。一句にして吉野を盡くせるもの、名所としては、貞室が

これは〳〵とばかり花の吉野山

舊跡としては、支考が

歌書よりも軍書に悲し吉野山

などあり。かばかり名だたる地にして古人の筆の至れり盡くせるを、今更にわれらが幼き筆に何をか言はん、何をか記さん。

（東園遺稿）

本居宣長
江戸時代國學の四大人の一
伊勢松坂の人
享和元年(一八〇一)歿
年七十二

吉水院
今の吉水神社もとは藏王堂の僧坊の一
後醍醐天皇の吉野に於ける最初の行在所
役小角聖寶僧正も居た處

子守の御社
吉野水分神社

二　菅笠日記

本居宣長

吉水院、近き處なりければ、まづ詣づ。この院は道より左へいさかさか下りて又少し上る處、離れたる一つの岡にて、めぐりは谷なり。後醍醐の帝のしばしがほどおはしましゝ處とて、有りしままに殘れるを、入りて見れば、げに物ふりたる殿のうちのたゝずまひ、よのつねの處とは見えず。かの帝の御像、後村上帝の御手づから刻み奉り給へるとて、おはしますを拜み奉るもかしこし。又その古き御寶物どもあまた有りて、見けれどことゞくくはえしも覺えず。此の寺の内にさゝやかなる屋のまへうちはれて、見渡しの景色いとよきがあるに、立入りて見いだせば、子守の御社の山、むかひに高く見やられて、其の山にも、かたへの谷などに

筆蹟
大德禪寺者宜レ爲ニ本朝無雙之禪苑一。安二棲千衆一令レ祝二萬年一。門弟相承不レ許二他門住一。不二是偏狹之情一爲レ重二法流一。殊染二宸翰一。貽二言於龍華一耳。
元弘三年八月廿四日
師宗峯國禪室

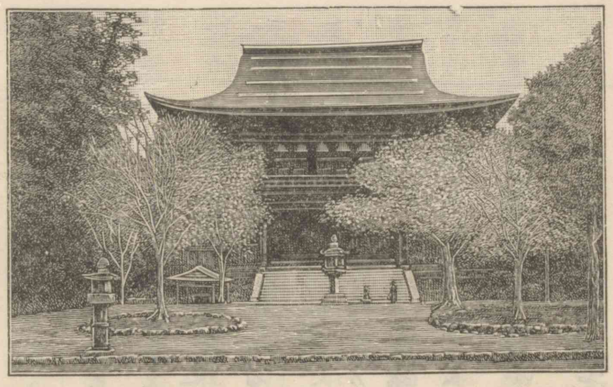
も、ひまなく見ゆる櫻どもの、今は青葉がちなるぞ、かへすがへすくちをしき。雲居櫻といふもあり、後醍醐のみかどの、此の花を御覽じて

後醍醐天皇宸筆

こゝにても雲ゐの櫻咲きにけり
たゞかりそめの宿とおもふに
とよませ給ひしも、
世々をへてむかひの山の花の名に
のこるくもゐの
あとはふりにき

藏王堂
吉野大衆の本據
金峰山寺
役小角の開基といふ
御像
金剛藏王權現
役小角が一千日
金峰山に練行して感得したものといふ
右の手に三鈷をもち片足をあげ目を怒らして惡魔降伏の相をなす

さて藏王堂に詣づ。御とばりかゝげさせて見奉れば、いともいとも大きなる御像の、怒れるみかほして、片御足さゝげて、いみじう恐しきさまして立ち給へる、三柱おはする、たゞ同じ御やうにて、けぢめ見え給はず。堂は南向にて、縱も横も十丈あまりありとぞ。造りざまいと古く見ゆ。前に櫻を四隅に植ゑたる所あり。四本櫻といふとかや。その片つ方に、鐵のいと大きなる物の、鍋などいふものゝさまして、げに損はれたるが打置かれたるを、何ぞといへば、昔塔の九輪のやけ



吉野藏王堂

我が父
小津三四右衛門
定利
元文五年（一七四〇）
歿
年四十六

落ちたるが、かくて殘れるなりといふ。口のわたり六七尺ばかりと見ゆ。その塔の大きなりけんほど推量られぬ。

なほのぼりて、藏王堂より十八町といふに子守の神まします。此の御社はよろづの處よりも心入れてしづかに拜み奉る。さるは、むかし我が父なりける人、子もたらぬ事を深く歎き給ひて、はるゞとこの神にしも願ぎごとし給ひけるしるしありて、程もなく母なりし人たゞならずなり給ひしかば、かつゞく願かなひぬといみじう悅びて、同じくはをのこゞ獲させ給へ」となんいよいよ深く念じ奉り給ひける。われはさてうまれつる身ぞかし。『十三になりなば、必ずみづからゐて詣でて、返り申しはせさせん。』と、のたまひわたりつるものを、今少しえたへ給はでわが十一といふになん、父はうせ給ひぬる」と、母なんものゝついでごと

にはのたまひいでて涙おとし給ひし。かくて其の年にもなりしかば、父の願果させんとて、かひ〳〵しう出立たせて、詣でさせ給ひしを、今はその人さへなくなり給ひにしかば、さながら夢のやうに袖もしぼりあへずなん。かの度はむげにわかくてまだ何事も覺えぬほどなりしを、やう〳〵人となりて物の心も辨へしるにつけては、昔の物語を聞きて神の御惠のおろかならざりし事をし思へば、心にかけて、朝ごとにはこなたに向きて拜みつつ、又ふりはへても詣でまほしく思ひわたりしことなれど、何くれとまぎれつゝ過ぎこしに、三十年をへて、今年又四十三にて、かく詣でつるも。契淺からず、年頃のほいかなひつるこゝちしていと嬉しきにも、落ちそふ涙は一つなり。そも花のたよりは、すこし心あさきやうなれど、こと事のついでならんよりは、さりとも

今年
安永元年（一七七二）

神もおぼしゆるして、うけ引き給ふらんと。猶たのもしくこそ。かゝる深きよしあれば此の神の御事は、ことによそならず覺え奉りて、年頃書を見るにも、萬づに心をつけて尋ね奉りしに、吉野水分神社と申しゝぞ、此の御事ならんと、はやく思ひよりたりしを、續日本紀に水分峯神ともあるは、まことにさいふべき處にやと地のさまも見定めまほしく、としごろ心もとなく思ひしを、今來て見れば、げにこのわたりの山の峯にて、いづこよりも、高く見ゆる處なれば、疑もなく、さなりけりと思ひなりぬ。又みくまりをよこなまりて、中頃には、御子守の神と申し、今はたゞに子守と申して、うみのこの榮を祈る神となり給へり。さて我が父も、ここには祈り給ひしなりけり。此の御門の前に、櫻多かる、いまさかりなり。（本居宣長全集——菅笠日記）

カラメテ・
ノガレズ・
ヨロイ・ヒタヽレ
ヒオドシ・
スキマ・カフト・オ
ハサム
ムラガル
イヘドモ
サツ
シユエン・ホ、

さる程に　後醍醐天皇元弘三年（一九三）閏正月朔日

三　村上義光

さる程に、搦手の兵、思ひも寄らず勝手の明神の前より押寄せて、宮の御座ありける藏王堂へ打つて懸りける間、大塔宮「今は遁れぬ處なり」と思し召し切つて、赤地の錦の鎧直垂に、緋縅の鎧の、まだ巳の刻なるを透間もなく召され、龍頭の兜の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に挾み、劣らぬ兵二十餘人、前後左右に立ち、敵の輩がつて控へたる中へ走り懸り、東西を拂ひ、南北へ追廻し、黑煙を立て、斬つて廻らせ給ふに、寄手大勢なりと雖も、僅かの小勢に斬立てられ、木の葉の風に散るが如く、四方の谷へと颯とひく。敵ひけば、宮は藏王堂の大庭に並み居させ給ひて、大幕打揚げて最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つ所の矢七筋、御頬さき、二の

ダクワ・シキガワ
キツサキ・クワセン・ケンゲキ
天帝　帝釋
修羅　阿修羅の略　鬪爭を好み常に帝釋らと戰ふ
シユウラ　Asura
カン
漢・楚　漢王劉邦と楚王項籍
イバク・ニラム　樊噲　劉邦の臣
トキ

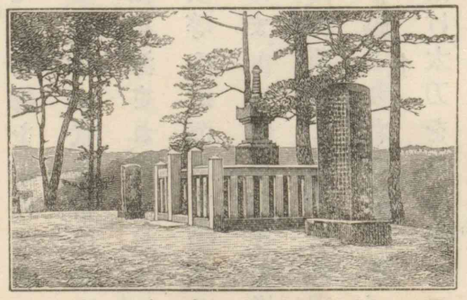
御腕、二箇所突かれさせ給ひて、血の流るゝこと瀧の如し。然れども、立つたる矢をも拔き給はず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら、大盃三度傾けさせ給へば、木寺相模、四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫いて宮の御前に畏まり、「戈鋌劍戟を降らすこと電光の如くなり、磐石岩を飛ばすこと春の雨に相同じ。然りとは雖も、天帝の身には近づかで、修羅彼が爲に破らる」とはやしを揚げて舞ひたる有樣は、漢・楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが劍を拔いて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら、帷幕を褻げて項王を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり。追手の合戰急なりと覺えて、敵味方の鬨の聲相交りて聞えけるが、げにも其の戰に自ら相當ること多かりけりと見えて、村上彥四郎義光、鎧に立つところの矢十六筋、枯野に殘る冬草の風に伏

村上義光　菊地容齋筆

したる如くに折りかけて、宮の御前に參つて申しけるは、「追手の一の城戸いふがひなく攻破られつる間、二の城戸に支へて數刻相戰ひ候ひつる處に、御所中の御酒宴の聲すさまじく聞え候ひつるについて參つて候。敵既に嵩に取上げて、味方の氣の疲れ候ひぬれば、この城にて功を立てん事今は叶はじと覺え候。未だ敵の勢を餘所へ廻し候はぬ前に、一方より打破つて、一先落ちて御覽あるべしと存じ候。但し後に殘り留つて戰ふ兵無くば、御所の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵何處迄も續きて追懸け參らせんと覺え候へば、恐ある事にて候へども、召されて候錦の御鎧直垂と御物具とを下し賜はつて、御諱の字を冒して敵を欺き、御命に代り進らせ候はん」と申しければ、宮「いかでかさる事あるべき。死なば一所にてこそともかくもならめ」と仰せられ

マネ
カホド
ヌギカエる
トムラフ
メイド・ナマタ

けるを、義光詞を荒らかにして、「かゝる浅ましき御事や候。漢の高祖滎陽に圍まれし時、紀信、高祖の眞似をして楚を欺かんと請ひしかば、高祖之を許し給ひ候はずや。斯程にいふがひなき御所存にて、天下の大事を思し召し立ちける事こそうたてけれ。早、其の御物具を脱がせ給ひ候へ」と申して、御鎧の上帶を解き奉れば、宮、げにもとや思し召しけん、御物具・鎧直垂まで脱ぎ。替へさせ給ひて、「我若し生きたらば、汝が後世を弔ふべし。共に敵の手に罹らば、冥途迄も同じ岐に伴なふべし」と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を南へ向つて落



村上義光の墓

タカヤグラ
ハザマ
ダイオンジョウ
ギヤクシン・センカ
ハカマ・ネリヌキ・オシハダ
ワキヅケ
カキ・ツカム
クヘヘル
ウケブセ

ちさせ給へば、義光は二の城戸の高櫓に登り、遙かに見送り奉り、宮の御後影の微かに隔らせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓の狹間の板を切落し、身を露して、大音聲を揚げて名のりけるは、「天照大神の御子孫神武天皇より九十六代の帝後醍醐天皇の第二皇子一品兵部卿親王尊雲、逆臣に滅され、恨を泉下に報ぜん爲に、只今自害する有樣見置きて、汝等の武運忽ち盡きて腹を切らんとする時の手本にせよ。」といふまゝに鎧を脱ぎて櫓より下へ投落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二小袖を押膚脱いで、白く淸げなる膚に刀を突立て、左の脇より右の脇腹まで一文字に搔切つて、腸摑んで櫓の板に投附け、太刀を口に銜へて、内臥になつてぞ伏したりける。

追手・搦手の寄手是を見て、すはや、大塔宮の御自害あるは。我先

マタ・ワカレル
クマザサ
フキメク
メイショウ

天の川　吉野の奥の地

夏目漱石　英文學者　小說家　名は金之助　東京生　大正五年歿　年五十

に御首賜はらん。とて、四方の園を解きて一所に集る。其の間に宮は引違へて、天の川へぞ落ちさせ給ひける。（太平記）

四　深山椿　　夏目漱石

鏡が池へ來て見る。觀海寺の裏道の杉の間から谷へ降りて、向ふの山へ登らぬうちに、路は二股に岐れて、自ら鏡が池の周圍となる。池の緣には熊笹が多い。或處は、左右から生ひ重なつて、殆ど音を立てずには通れない。木の間から見ると、池の水は見えるが、どこで始つて、どこで終るか、一應廻つた上でないと見當がつかぬ。歩いて見ると存外小さい。三町程よりあるまい。只非常に不規則な形で、處々に岩が自然の儘水際に横たはつて居る。緣の高さも、池の形の名狀し難い樣に、波を打つて、色々な

起伏を不規則に連ねて居る。池をめぐつて雜木が多い。何百本あるか勘定がし切れぬ。中にはまだ春の芽を吹いて居ないのがある。割合に枝のこまない所は、うらゝかな春の日を受けて、萌出でた下草さへある。壺菫の淡い影が、ちらり〳〵と其の間に見える。

余は草を茵にそろりと腰を卸した。席をずらせて段々水際まで出て見る。余が茵は天然に池の中に流れ込んで、足を浸せば生溫い水につくかも知れぬといふ間際でとまる。水を覗いて見る。眼の屆く處はさまで深さうにもない。底には細長い水草

が往生して沈んで居る。余は往生と云ふより外に形容すべき言葉を知らぬ。岡の薄なら風に靡く。藻の草ならば誘ふ波を待つ。百年待つても動きさうもない、水の底に沈められた此の水草は、動くべき總べての姿勢を調へて、朝な夕なに、弄られる期を待暮し、待明し、おのが思を莖の先に籠めながら、今に至るまで遂に動き得ずに、また死に切れずに、生きて居るらしい。

余は立ちあがつて、草の中から手頃の石を二つ拾つて來る。眼の先へ一つ抛り込んでみる。ぶく〳〵と泡が二つ浮いて、すぐ消えた。「すぐ消えた、すぐ消えた」と、余は心のうちで繰返す。すかして見ると、三莖程の長い髪が、慵げに搖れかゝつて居る。見附かつてはと云はんばかりに、濁つた水が底の方から隱しに來る。今度は思ひ切つて、懸命に眞中へ投げる。ぽかんと幽かに

エノグバコ
オウシ
マニ・ツバキ

シンカン

デヒ
ウベフ

ハデ

音がした。靜かなるものは決して取合はない。もう投げる氣も無くなつた。繪具箱と帽子を置いた儘右手へ廻る。二間餘りを爪先上りに登る。頭の上には大きな樹がかぶさつて、身體が急に寒くなる。向ふ岸の暗い處に椿が咲いて居る。椿の葉は綠が深すぎて、晝見ても、日向で見ても、輕快な感じがしない。ことに此の椿は岩角を奥へ二三間遠退いて、花がなければ何があるか氣のつかない處に、森閑としてかたまつてゐる。其の花は一日勘定しても勘定し切れぬ程多い。併し眼がつけば、是非勘定したくなる程鮮かである。唯鮮かと云ふばかりで、一向陽氣な感じがない。ぱつと燃立つやうで、思はず氣を奪られた後は何だか凄くなる。あの花の色は唯の赤ではない。眼をさます程の派手やかさの奥に、言ふに言はれぬ沈んだ調子を

ショウデン
シヨウレン
エフ
カイドウ

ヨソホフ
ユビル

持つてゐる。悄然として萎れる雨中の梨花には、只あはれな感じがする。冷やかに艶なる月下の海棠には、只愛らしい氣持がする。椿の沈んで居るのは全く違ふ。黑ずんだ、毒氣のある、恐しみを帶びた調子である。此の調子を底に持つて、表面はどこまでも派手に裝つてゐる。而も人に媚びる態もなければ、殊更に人を招く樣子も見えぬ。ぱつと咲き、ぽたりと落ち、ぽたりと落ち、ぱつと咲いて、幾百年の星霜を、人目にかゝらぬ山陰に落着き拂つて暮してゐる。

見てゐると、ぽたりと赤い奴が水の上に落ちた。靜かな春に動いたものは只此の一輪である。しばらくするとまたぽたりと落ちた。あの花は決して散らない。崩れるよりも、かたまつたまゝ枝を離れる。枝を離れるあたりは今でも少々赤い樣な氣

がする。また落ちた。地の上へ落ちたのか、水の上へ落ちたのか、區別がつかぬ位靜かに浮く。また落ちる。あれが沈む事があるだらうかと思ふ。年々落ちつくす幾百輪の椿は、水につかつて、色が融け出して、腐つて、泥になつて、漸く底に沈むのか知らん。幾千年の後には此の古池が、人の知らぬ間に、落ちた椿の爲に埋れて、元の平地に戻るかも知れぬ。又一つ大きいのが血を塗つた人魂の樣に落ちる。また落ちる。ぽたりくと落ちる。際限なく落ちる。（漱石全集——草枕）

正岡子規
俳人
歌人
名は常規

五　葵（アフヒ）

暖かな雨が降るなり枯葎（ムグラ）　正岡子規

地に落ちし葵踏みゆく祭かな

雲の峯水なき川を渡りけり
朝鳥の來ればうれしき日和かな

伊豫國松山生
明治三十五年歿
年三十六
祭
五月十五日京都
賀茂の葵祭
筆蹟
春の月植木の中を上りけり

春の月植木の中を上りけり

子規筆

雜頭の十四五本もありぬべし
冬川の栞屑（シヲリ）啄む家鴨かな
冬の日のあたらずなりし乾飯（ホシヒ）かな
元日の人通りとはなりにけり
夕月や納屋も厩も梅のかげ
矢車に朝風つよき幟（ノボリ）かな
初冬の竹綠なり詩仙堂

内藤鳴雪
俳人
漢學者
名は素行
伊豫國松山生
大正十五年歿
年八十
詩仙堂
京都府葛野郡一乘寺村にある石川丈山隱栖の處
京都市の北郊

コガネムシ
ヤミ
アンド

筆蹟
元日や一系の天子不二の山

高濱虛子
俳人
小說家
名は清
明治七年愛媛縣松山市生

筆蹟
青き色の殘りて寒き干菜哉　虛子

村上鬼城

元日や一系の天子富士の山

鳴雪筆

一つ根に離れ浮く葉や春の水　高濱虛子

金龜子（こがねむし）なげうつ闇の深さかな

虛子筆

部屋々々にくばる行燈や鹿の聲

遠山に日の當りたる枯野かな

殘雪やごうごうと吹く松の風　村上鬼城

オウカミ
ホコリ
シップウ
ワッカ
マク

俳人
名は莊太郎
慶應元年（一八六五）
群馬縣高崎生

筆蹟
傘にいつか月夜や時鳥　鬼城

長塚　節
歌人
小說家
茨城縣結城郡生
大正四年歿
年三十七

五月雨や起き上りたる根無草

鬼城筆

大空をあふちて桐の一葉かな

沼涸れて狼渡る月夜かな

六　蛙

長塚　節

春は空から、さうして土から微かに動く。毎日のやうに西から埃を捲いて來る疾風がどうかするとはたと止つて、空際にはふはふとした綿のやうな白い雲がほつかりと暖かい日光を浴びようとして纔（わづ）かに立騰つたといふやうに、動きもしないでじ

シゲキ
ツボミ
ケッキヨ
ジョウタイ
トダンバ

つとして居ることがある。水に近い濕つた土が暖かい日光を思ふ存分に吸つて其の勢ひづいた土のかすかな刺戟を根に感ぜしめるので、田圃の榛の木の地味な蕾は目に立たぬ間に少しづつ延びてひら〳〵と動き易くなる。其の刺戟から蛙はまだ蟄居の情態に在りながら、稀にはそつちでもこつちでもくゝ〳〵と鳴き出すことがある。空から射す日の光はそろ〳〵と熱度を增して、土はそれを幾らでも吸うて止まぬ。土は凡てを段々と刺戟して堀の邊には蘆や花芝や

長塚節

花芝　一米餘の禾本牧草になる

モダケル
スヽ
マク
アハテル
スイミン
フックワツ
ヘッキ
タンポ
ワカバ
サワヤカ

其の他の草が空と相映じてすつきりと其の首を擡げる。軟かさに滿たされた空氣を更に鈍くするやうに、榛の木の花はひらひらと止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒きちらして居る。蛙は假死の情態から離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな樣子をして空を仰いで見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて其の長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで遠く聞く時には彼等の騷がしい聲は只空にのみ響いて快げである。

彼等は更に春の至つたことを一切の生物に向つて告げる。草や木が心づいて其の活力を存分に發揮するのを見ないうちは鳴くことを止めまいと力める。田圃の榛の木はとうに花を捨てゝ嫩葉の姿になつて見せる。黄色みを含んだ嫩葉が爽かで

アヲイ
ハル
ソラマメ
カレン
ヒトミ
ハツカシイ
コウケヨク
ヒバリ
サス
タケル・ヨブ
ハズ
サヘズル
トビコエル

かつ朗かな朝日を浴びて快光を保ちながら、蒼い空の下に、まだためらつて居る。　岬のやうな形に偃つて居る水田を抱へて、周圍の林は漸く其の本性のまに〳〵勝手に白つぼいのや赤つぼいのや黄色つぼいのや色々に茂つて、それが氣が附いた時に急いで一つの深い緑になるのである。　雑木林の其處ら此處らに散在して居る開墾地の麥もすつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて、羞づかしさうに葉の間からこつそりと四方を覗く。　雑木林の間には又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。　其の麥や芒の下に居を求める雲雀が時々空を占めて春が闌けたと喚びかける。　さうすると其の同族の聲のみが空間を支配して居る可き筈だと思つて居る蛙は、其の囀る聲を壓し去らうとして互の身體を飛越え〳〵鳴き立てるので、小勢な雲

ヒソム
マバユイ
キラメク
ネジキレル
イヨ〳〵
ジシヤク
トル・ワラ・クヽル・ホシイ
モ・ヒキ

雀はすつとおりて麥や芒の根に潜んでしまふ。　さうしては蛙の鳴かぬ日中にのみ、之を仰げば眩ゆさに堪へぬやうに其の身を遙かに煌めく日の光の中に沒して、其の小さな喉の拗切れるまでは烈しく鳴らさうとするのである。　蛙は愈益鳴き誇つて樫の木のやうな大きな常緑木の古葉をも一時にからりと落ちさせねば止むまいとする。　此の時凡ての樹木や冬の間にはぐつたりと地に附いて居た凡ての雑草が爪立して只空へ〳〵と暖かな光を求めて止まぬ。　土がそれをじつと引きとめて放さない。　それで一切の草木は土と直角の度を保つて居る。　冬の間は土と平行することを好んで居た人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して各自に手に農具を執る。　紺の股引を藁で括つて皆田を耕し始める。　水が欲しい

くりかえされて

イッセイ
サケル・ノド
ボウチョウ
ユルガス
ネリイト
ソ、グ
カリカブ
セマル
ビンショウ
ノム
タンボ

と人が思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふ程喉の袋を膨脹させて身を撼がしながら殊更に鳴き立てる。白い練絲のやうな雨は水が田に滿つるまでは灑いで又灑ぐ。鳴くべき時は鳴く爲にのみ生れて來た蛙は刈株を引返し引返し働いて居る人々の周圍から足下から逼つて「敏捷に其の手を動かせ、動かせ」と促して止まぬ。蛙がぴつたりと聲を呑む時には日中の暖かさに人もぐつたりとなつて田圃の短い草にごろりと横になる。

長塚節の家

ヒヤクショウ
ツカレル
ジユクスイ
ショウモウ
カイフク・スキマ
フトン
キセツ
ハンモ
ケイドク
シバ〳〵

蛙は靜かな夜になると、如何に自分の聲が遠く且遙かに響くかを誇るものゝ如く力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時蛙の聲はめつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた百姓の總べてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。彼等が雨戸の隙間から射す夜明の白い光に驚いて蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に逼る蛙の聲に其の覺醒を促されて、井戸端の冷い水に全く朝の元氣を喚返すのである。草木は遠く遙かに響けと鳴く其の聲に搖られつゝ夜の間に生長する。櫟や楢や其の他の雜木は蛙が鳴けば鳴く程、さうしてそれが鳴き止む季節までは幾らでも繁茂することを繼續しようとする。其處には毛蟲や其の他のあさましい損害が或は有るにしても、しと〳〵と屢梢を

アヨイ
サハヤカ
カゲ
オシウツス
ライシ

フルス
セド
オボツカ

ニボル

鬼怒川
栃木茨城兩縣を流れて末は利根川へ入る

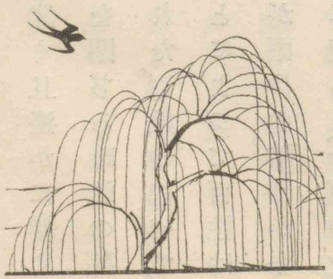
薄田泣菫
文學者
名は淳介
明治十年岡山縣連島町生

打つ雨が空の蒼さを移したかと思ふやうに力強い深い綠が地上を掩うて爽かな涼しい蔭を作るのである。鬼怒川の西岸一部の地にもかうして春は來り且推移した。憂あるものも無いものも、ひとしく耒耜を執つて各、其の處に就いた。（長塚節全集――土）

七　燕

薄田泣菫

軒の古巣をたちはなれ、
背戸の柳の木傳ひに、
覺束なげの音ひたてゝ、
羽試むる燕。
一つ飜るゝ野の花に、



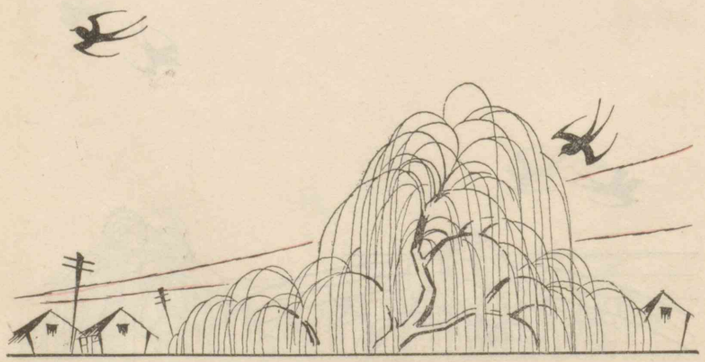
巣立する所の若燕に
將來のかがやかしさが
こもつている

ミヅエ
ソムル

シオヅシ

春の香高くしみ渡り、
瑞枝を染むる日の影の
花やかにさす朝ぼらけ、
翼しめりて立ちいづる
汝が世はげにも幸ありな。

その紫の淺くとも、
やがて木の葉に身をのせて、
八重の潮路を越えぬべき
羽とし見れば力あり。
歌ふ音色の若くとも、
やがて霞める青柳に、



ニヒゲツ
ヌマ
ミギハ
イシヅエ
カハ
タクミ
コケカゼ
アヤグモ
ウガツ
モノグルイ

かの新月を呼びいづる
それと思へば調べあり。
小波ぬるむこもり沼の
水際の泥をついばみて、
はにふが軒を柱礎に
興せる壁を塗る見れば、
汝は才ある工匠かな。

東風かろき城の春、
花の彩雲穿ち來て
獨り興ある物狂、
右にかけりて色を蹴り、

クザキ
ユヌグレ
カネ
ウツリカ
エうて
ヒン
ハルサメ
ワク

佐保姫
春の女神
佐保は古の平城の都の東方の地

左に飛びて香を碎き、
こぼるゝ露に驚きて
花より花に迷ひ入り、
風もあだめく夕暮の
鐘に打たれて飛びくれば、
上羽にしめる移香や、
醉うて眠れる佐保姫が
鬢の油やこれならし。

煙に似たる春雨の
一村こめて降りしかば、
花の枝より涌きいづる

モ、ウマザケ
シボケ
ドキョウ
ソウトウ

アヽ

ホノミエル
ザクロ
スヾメゴ

桃の美酒酔みあきて、
新發意が讀經聲細く、
花散る寺の層塔に、
光まばゆき夕なぎの
西の方をば夢みつゝ、
噫、噫、鳥と名は呼べど、
人に知られぬ一筋を
胸にひめずや、燕。

青葉がくれに仄見ゆる
石榴の花のくれなゐに、
片笑みて鳴く雀子の

ケブサ
ケコ
ケ

シノヽメ

トダヅ

ナラ

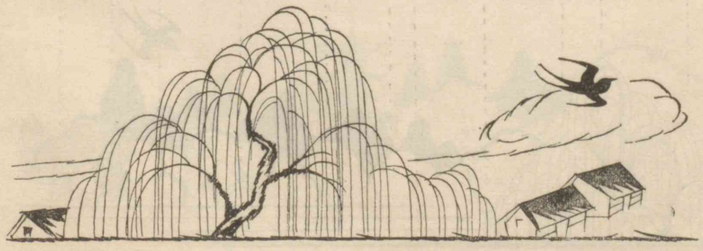
クレナイ

その本傳ひも何かせん。
情はふかき女子の
乳房を含む稚兒に似て、
さはれば靡く青柳の
絲にすがれるふりを見よ。
東雲早く巣を立ちて、
雲の旗手を靡けつゝ、
朝羽を振ふ蘆田鶴の
舞の姿は何かせん。
風に吹かるゝ楢の葉の
尾上越ゆるも忍ばれて
雲紅の夕ばえに

ヒルガエル
ウナジ
ブドウ
ニヨゲ
シロタエ
ハダ
ヒトミ
ウヒヲ
ツヤ
カムリ
ハブキ

ヒルガエル
飄り行く姿かな。

圓き項は葉隱れに
かゝる葡萄を見る如く、
胸の和毛の白妙は
をさなき子らが肌に似て、
瞳子の色のらうたさは
潮にすめる一つ星、
上毛の艶の紫は
冠に彫れる玉の色。
鳥よ。羽振につかれなば、
觸れてやさしき夕影に



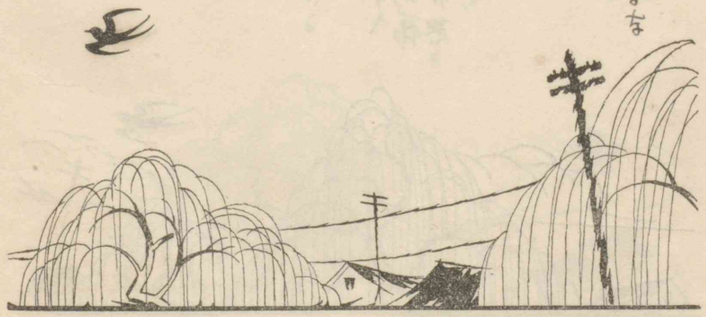
フジナミ
ケラク
ミヤビ

藤波靡く下がくれ、
若紫のはなめでて
天の快樂を味はへよ。
彈くや大絃小絃の
風に亂れて鳴る如き
汝がすさみの歌聞かば、
誰かは憂を忘れ井の
水銹に似たる身をすてゝ
ふりさけ見れば紫の
雲の行方を慕はざる。
あゝうら若き吾が友よ、

口づさんでいる
極楽世界へ行きたい樣な氣が起って來る。

フクロウ
な——そ　禁止
アヲサギ
ヒビキ
ケラク

ゆめ。梟のさかしらに　かしこそうに
光な避けそ、葉がくれに。そんな形をするな
こもり沼に立つ。青鷺の
かひなき事をわづらふな。思ひなな
朝日に舞へば光あり、
夕日に鳴けば。韻あり、
風に色あり、野に香あり、
森に歌ある夏の日の
あかぬ。快樂を求めずや。
花にたぐへるかんばせは、
實ならずや、若き身の。
歌にうるめる眼の色は、



ホマレ
コヅエ
ネタシ　ソセ
キウセイ
シンジコハン　ソッテ
ノンキ
ケンセイ
ウス

厨川白村
英文學者
名は辰夫
京都帝國大學教授
文學博士
京都生
大正十二年卒
年四十五
出雲神話
素戔嗚命の大蛇退治大國主命の國土平定など
宍道湖
松江市の西にある淡水湖
嫁が島
宍道湖中の小島

。譽ならずや、若き身の。
飛べや。梢の燕。
行方はそれと知らねども、
。嫉しと思ふ汝が旅の
。袖ひきとめん吾が身かは。（泣菫詩集）

神をいって止める自分であろうか　ではない　飛べよ

八　小泉八雲の舊栖

厨川白村

山陰の古都松江は今もなほ出雲神話を想はせる夢の都である。さうだ、眠るが如き夢の都である。。宍道湖畔の水郷に、土地の人はうつら〳〵と夢の國をたどつてゐる。水に臨める旅館の欄に倚つて松江大橋、嫁が島、どこを眺めて見ても、思ひ切つて。暢氣なものである。すべてがどんよりして。沈靜な薄暮の氣に包ま

ミンシュウ
ゲイジュツ

キユウキヨ

松江名所は
松江名所は數々あれど千鳥御城に嫁が島
千鳥お城
松江城

ラフカディオ、ハーン

Lafcadio Hearn
(1850—1904)
詩人も英國人にして小泉八雲と歸化し中國松江第五高等學校東京帝國大學講師をしたこと

れて、今光明の國から去らうとする影を見るやうだ。

此の夢の都たる出雲の國の鄕土から生まれた民衆藝術である安來節に、「松江名所はかず〳〵あれど」と數へた千鳥お城よりも、嫁が島よりも、更に遙かに意義の深い名所が、外にも一つある。それは殆ど世界的に有名な名所であつて、しかも日本人の餘り知らない名所だ。否、松江の人さへ多くは知らない名所だ。いふまでもなく、それは小泉八雲先生——ラフカディオ、ハーン氏の舊居である。

小泉八雲

日本を見物に來る西洋人の中には、日本人のあまり注意しなか

イセキ
カンコウ

キセイ
シヨウカイ

シンスイ
ドウサツ
エイビン
チヨッカン

フキユウ

つたこの名所を尋ねて、あの不便な山陰線の汽車に乘つて見に行く人が近頃は殊に多い。それどころか、はる〳〵太平洋の彼方から先生の遺跡を訪はんがためにのみ日本に來遊する外人もあるのだ。現に先頃米國で先生の全集刊行の擧あるに際して、松江時代の舊居の寫眞をとるために、かの國からわざ〳〵この國へ出かけて來た人さへあるのだ。あの稀世の名文を以て日本を世界に紹介された先生の遺蹟は十分に保護せらるべきものであらう。深邃なる洞察と鋭敏なる直觀とにより正しき日本の相を世界に紹介してくれた先生の恩を忘れてはなるまいと思ふ。

先生にはあの十數卷の名著がある。英語の滅びないかぎり、ラフカディオ、ハーンの文名は世界に不朽なのである。從つて、そ

スンゴウ
ソンエキ
シンピ
キオク
ジョウシ
ハイザンケヨウラク
モンガマヘ
ゲンカン
太ウケンジダイ
トウロウ
アク
エンガハ

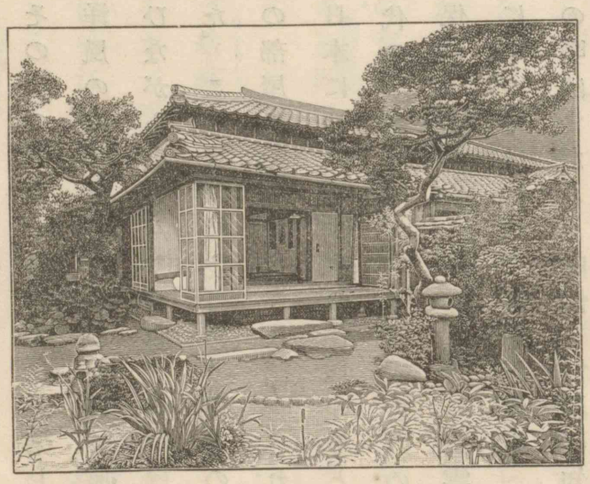
の遺蹟を保護しようが、しまいが、今は世にない先生にとつては、寸毫の損益するところはあるまい。たゞ我々日本人としては、一枝の筆の力を以て島帝國の神祕を世界に公開せられた先生を永く記憶せずには居られぬのである。

城址の美しい青葉を照らす午後の日ざしが傾くころ、靜かな濠ばたの或家の門に私の車は停つた。それはいかにも「さむらひ」の敗殘凋落のあとを想はせるやうな家中屋敷の一つであつた。古びた門構といひ、正面の玄關といひ、見るからに封建時代そのまゝのものであつた。正面の玄關の左手に四疊があつて、それは南の方の小さい庭に面してゐる。苔むした石燈籠や庭石もかつては先生が飽かず眺められたものであつた。殊に緣側に近い處にある百日紅だの、珍しい老木の大木蓮だのは、先生のこ

アイジュ
アイセキ
オウゴン
ドクソウ
ケヨウシデン
ホウヨン

ハマドライアッド
Hamadryad
樹の精
森の女神

との外なる愛樹であつたと聞くさへ懷かしい。樹木の精ハマドライアッドの神話を語つた古代のギリシャ人のやうに、先生も亦草木に宿る生命に強い愛惜の念を持たれた。後年東京に移られてからも、或寺院の老樹を黃金に代へて惜しげもなく伐りたふさうとした俗僧を見て、ひどく怒られたといふ話がある。



小泉八雲の松江市の舊栖

先生はその深い愛の生活、强大な感情生活の裡に自然と人生と超自然のすべてを抱擁して

イスザブトンウケトケル

ヒョウハクコキヤク

キュウハンシ

根岸さん　根岸磐井　松江の銀行家

大久保の邸　東京の西郊　大久保町大久保

ゐられた人であつた。

その次の間の十畳は、先生が樂しく起居された茶の間であつた。洋風の椅子などを用ひないで座蒲團に坐り、日本の刻煙草を吸ひながら、奥さんや來客と打解けて語られたのはこの室であつた。この家の持主であり現在の主人である根岸さんは、私をこの部屋に通して、色々な話をされた。

日本に於ける先生の住居の地としては、この松江の外に熊本時代のもあれば、また現在未亡人の住まつてをられる東京の大久保の宅もある。しかしこの出雲の地は、日本に歸化された先生に取つては特殊な意味がある。天外萬里、漂泊の孤客として、その頃はまだよく内情を世界に知られなかつた遠い〳〵日本のしかもまた山陰の片ほとり、夢の都、神の都に來て、そこで舊藩士

メトルトウワイトツショメイケヨブンダンキョウイキョショウケツコンボツトウキュウセイシュウエンヒクコウキシンソル

日本瞥見錄

"Glimpse of Unfamiliar Japan"

ロバート、ルイス、スティヴンソン

Robert Louis Stevenson (1850–1894)

サモア

Samoa

南太平洋中にある大小十四箇の群島

の女小泉氏を娶られた。そして、英米の社會からは全く韜晦し去つて、突如としてこの地からあの最大の名著「日本瞥見錄」二卷を公にされたのだ。「作者は果して何處にある」「如何なる人ぞ」と、かなたの文壇の驚異となり、はてはラフカディオ、ハーンその人の實在をすらも疑はれた時があつた。（先生と同じく近世散文の巨匠であるロバート、ルイス、スティヴンソンも、故國スコットランドを出てからは、足跡天下に遍く、米國のサンフランシスコで結婚して後太平洋をさまよひ、はてはサモアの島に世を終へるまで、後の研究者はその足跡をたどるのに沒頭してゐる。私は松江に於ける先生のこの舊栖の地が、南洋のサモアに於けるスティヴンソン終焉の地の如くに、今後は益々多くの文學巡禮者を惹きつけてその好奇心を唆るであらうと思ふ。先生御自身

アイセキ
マハリミチ
ショサイ
カンジヤク
モヨウ
キユウタイ

も、その樂しいゆかしい思出と愛惜とが特に松江のこの家から離れなかつたものと見えて、後年熊本から東京帝國大學に轉任される途中――まだ全く山陰地方に汽車の便のない頃――わざ〳〵廻路をしてこの第二の故郷を訪はれ、「わが家に歸つた」といつて喜ばれたさうである。

この茶の間に接した北向の六疊の一室が、先生の書齋であつたといふ。すべてが閑寂な、さびた部屋である。障子を開けて緣側に出ると、そこの庭には小さな池があつて、眞中に一本の松を植ゑた小島がある。裏手の方は以前しばらく模樣がへしてあつたのを、近頃根岸さんがまた先生在住の頃の舊態に復せられたのださうだ。庭の左の方にある土藏を指さしながら、根岸さんは色々と話をして私に聞かされた。

ズイブン
タクサン
イタケ
ヒメイ
ゴケソウ
カキネ
モリ
ホトトギス
トジコモル
メイソウ
ソウサク
ジユカン
モレル

「この池の中には隨分澤山蛙がゐたさうですが、それを捕りに藏の後の方から蛇だの鼬だのが出て來たもんださうです。そして蛙が捕られると、あはれな悲鳴を揚げるので、その時は先生の一家が皆飛出して來て大騷をしたと、奥さんが話されました。それで先生は時々食殘りの肉を皿に入れて藏の石段に置き、蛇や鼬に與へられました。『私が御馳走してやるから、蛙を捕ることだけはよしてくれよ。』と先生はいつもいはれたさうです。」

さういふ事も根岸さんは話された。裏の籬を越えて右手に見えるのが赤山の杜で、それから聞える鳩ぽつぽや杜鵑の聲に耳を澄ましながら、先生はこの書齋に閉籠つて、冥想もし、讀書もし、創作もされたのであつた。また正面遙か向ふの方に樹間を洩

ジョウシン　山中鹿之助　名は幸盛　尼子氏の臣　智勇の聞えが高かつた　天正六年（一五七八）歿　年三十六

レンカベン　タウヒニッツ　Tauchnitz　ドイツのライプチッヒの書肆の名

ミテイコウ　たなばた物語

スウヘン　"The Romance of Milky Way"

アハビガヒ

イヘヅト

れて見える山が、山中鹿之助の城址ださうである。

ゆつくり話を聽いてゐる間に、日は暮れさうになつた。再び部屋に歸つて座に就くと、もう人の顏がぼんやりするほどにほの暗かつた。私はこの夢の都に來て夢の家を尋ね得たことを喜びながら、暫くして辭し去つた。門前の濠の水は深く濁つて、青葉のゆふべの影を宿してゐた。

翌日私は京に歸る前、記念のために松江の本屋でドイツのタウヒニッツの廉價版の「たなばた物語」一部を求めた。これは先生が雜誌などに載せられたゞけで、つひに未定稿のまゝ一冊の本にはまとめずに世を去られた數篇を先生の歿後に出版したものである。松江名物の大きな鮑貝を五つと先生のこの遺著とを家苞にして、私は夢の都たる松江を去つた。（厨川白村集）

九　松江の曉

落合貞三郎

落合貞三郎　英文學者　學習院教授　明治八年島根縣松江生

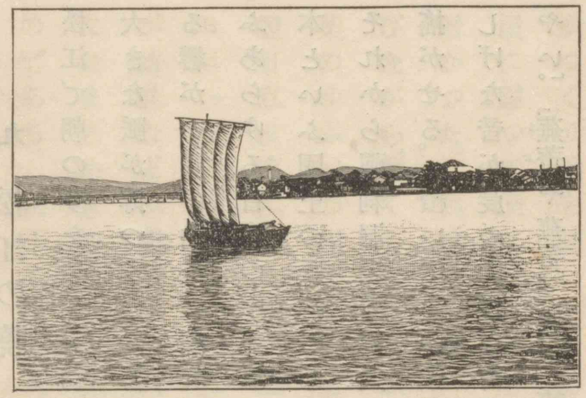
松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな大きな脈が搏つやうに響いてくる米搗の音である。杵の落ちる響が一定の拍子で漏れてくるのが、日本人の日常生活に伴なふあらゆる音響の中で最もあはれに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脈搏である。

それから、禪刹洞光寺の大きい鐘がごうんと響いて、市街の空を搖がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から太鼓の寂しげな音が晨の勤行を告げる。最後に行商人の、物賣の聲、「大根やい。」「蕪菁（かぶ）や蕪菁。」「薪（もや）や薪。」

明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の

洞光寺　松江市雜賀町にある曹洞宗の寺

大橋川　中海と宍道湖との間を通ずる川



松江大橋

底から伸びた春の若葉の軟かな綠の雲越しに朝景色を眺めやつた。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方ではわなゝくやうに萬象を映寫して微かに光つてゐる。此の川は宍道湖に向つて口をあけ、湖は右手へ擴がつて、杳かなる連丘に包まれてゐる。對岸の日本の家屋は戸が皆閉つてゐるので、恰も箱を閉ぢたやうである。夜は明けたが、日はまだ出ない。遙かに見渡すと、薄色の霞が湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲狀をした長い帶は、日本の昔の繪で見る通りであるが、實際の現象を眺めたことのない者には、畫工が奇を衒つたとしか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、峰から峰へ、はて知らぬ長さの紗のやうに横に延びて居る。だから湖水は實際より遙かに大きく、昧爽の空の色と入交つた、美しい幻の海となつて見える。山々は霧の中に浮ぶ島嶼で、夢の樣な一帶の丘陵は果てしのない土手道かと怪しまれる。そして霧が立つに連れて、その趣はおもむろに變つて行く。朝日の黃色の緣が見えてくると、今までのよりは更に弱い、細かな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水のかなたにある高い建物の木地の色が美しい靄の爲に蒸氣の立つ黃金色へとかはる。

朝日の方へ向くと、澤山。橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が今しも帆を揚げようとしてゐる。こんな。奇妙な。恰好の、美しい船を見たことがない。正にこれ。蓬萊の夢である、霞にぼやけた船の。精靈である。しかし此の精靈は雲と同樣、光線を受けて、薄青い光の中で金色に震へてゐる。

庭先の川端から手を拍つ音が聞えて來る。一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えない。しかし對岸の。埠頭の石段を下りる男や女の姿が見える。めい〳〵帶に小さい淺黃の手拭を挿んで、顏と手とを洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に必ず行ふ。潔齋である。それから顏を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。長い橋の上からも他の拍子の音が反響の如くに出てくる。遠くにある、輕い、優美な、そして新月のやうに。彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異樣な。恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黃金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が增して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が今皆朝日——お日樣——天照大神を拜んでゐるからである。「いしくも貴き日の造り主よ。この心地よき日光を賜ひて世界を麗はしくなし給ふことを謝し奉る。」言葉はこの通りでないまでも、これが無數の人の心情である。

杵築の大社
出雲大社
祭神は大國主命
官幣大社

一畑山
島根縣簸川郡東村にある山
一畑寺の本尊は藥師如來

朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築の大社に向つてもさうするのである。顏を東西南北に向けて群神の名を低聲で唱へる者さへ隨分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山の頂を眺めて、盲の眼を開き給ふといふ藥師如來の大伽藍のある處に向ひ、今度は佛教の儀式に從ひ、掌を合はせて輕く擦る

ものもある。しかし日本で最古の此の國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰も〳〵古風な神道の祈の文句を唱へる。「祓ひ給へ、淨め給へ、とほ神ゐみため」。

手を拍つ音が歇んで、一日の仕事がはじまり、橋の上にはからころといふ下駄の音がだん〳〵高く響いてくる。大橋の上で鳴る下駄の音は忘れられない音である。――速くて、陽氣で、音樂的で、盛な舞踏のやうな音である。實際また舞踏である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る數へきれぬ人の足がちら〳〵するのは驚くべき光景である。この足は皆細くて、適當に均齊を得てゐて、希臘の古甕に書いた人物の足のやうに輕やかである。

やがて學校へ急ぐ子供たちが出てくる。彼等の駈ける時に、綺麗な飛白の着物の濶い袖が波動するのは、ちやうど大きな蝶が羽搏きするやうである。親船は白色や黄色の大きな翼を擴げるし、埠頭の側で夜中眠つてゐた小蒸氣船は煙突から煙を吐き始める。（小泉八雲全集――「まだ知らぬ日本の瞥見」譯）

木端　栗柯亭　眞宗の僧　安永二年（一七七三）寂

頭光　本名岸誠之　寛政八年（一七九六）歿　年七十

10 世の中

絲瓜　木端

世の中は何のへちまと思へども
ぶらりとしては暮されもせず

頭光

郭公

郭公自由自在にきく里は
酒屋へ三里とうふやへ二里

狂歌　鎌倉時代軍記者　盛な時

何にも風にかけないと思つてゐるが

朱樂菅江
本名山崎景貫
寛政十年(一七九八)
歿
年六十

四方赤良
本名太田覃
蜀山人
漢學者
狂歌師
文政六年(一八二三)
歿
年七十五

郭公鳴きつる
郭公鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ殘れる(後德大寺左大臣藤原實定)

宿屋飯盛
本名石川雅望
國學者
狂歌師
文政十三年(一八二九)歿
年七十八

葛飾(カツシカ)の龍眼寺に萩を見侍りて　朱樂菅江

よせぎれと見ゆる御寺の錦かな
どこもかしこもはぎだらけにて

早春　四方赤良

生醉の禮者を見れば大道を
横すぢかひに春は來にけり

早蕨　四方赤良

早蕨が握りこぶしを振りあげて
山の横つらはる風ぞふく

郭公に有明の月かきたる繪に
郭公鳴きつるあとにあきれたる

天地の力をも入れずして天地を動かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はしむるは歌なり(古今集序)

兼好法師
室町時代の文學者
俗名吉田兼好
正平五年(一三一〇)寂
年六十九

仁和寺
京都府葛野郡花園村御室にある眞言宗の古い寺
京都の西四粁

石清水八幡宮
京都府八幡町男山の石清水八幡宮
應神天皇神功皇后等を祭る

仁和寺の南廿粁
極樂寺

後德大寺のありあけの顏
歌人　宿屋飯盛

歌よみはへたこそよけれ天地の
動き出してはたまるものかは

二　仁和寺　兼好法師

先達

仁和寺にある法師、年よるまで石清水をがまざりければ心うくおぼえて、或時思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺・高良などをがみて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの人にあひて、年頃思ひつること果しはべりぬ。聞きしにも過ぎて貴くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へ登

男山の麓にある寺
高良　男山の麓にある末社
武内宿禰を祭る

スイキョウ
ヱヒて
アシザナヘ
カナず
ユエン
マトふ
ハル

りしは何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそほいなれと思ひて、山までは見ず」とぞいひける。

少しの事にも先達はあらまほしき事なり。

醉興

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならんとする名残とて、各あそぶ事ありけるに、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて頭に被きたれば、つまるやうにするを、鼻をおし平めて舞ひいでたるに、滿座興に入ることかぎりなし。

暫し奏でて後、拔かんとするに大方拔かれず。酒宴事さめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて、血垂り、たゞ腫れに腫れて、息もつまりければ、打割らんとすれど、たやすくわれず、響きて堪へ難かりければ、叶はで、すべき樣なくて、三

カタビラ
クスレ

鼎かづき（浮田一蕙筆）

足なる角の上に帷子を打懸けて、手を引き、杖を突かせて、京なる醫師がりゐて行きけり。道すがら人のあやしみ見ることかぎりなし。醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけんありさま、さこそはことやうなりけめ。ものをいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。

「かゝることはふみにも見えず、傳へたる敎もなし」といへば、また仁和寺に歸りて、親しき者、老いたる母など枕がみに寄りゐて泣きか

最明寺入道
執權北條時頼出家して鎌倉の山内の最明寺に入る

平宣時
大佛氏
北條時政四世の孫
時政
義時
泰時
時氏
時頼
時房
朝直
宣時

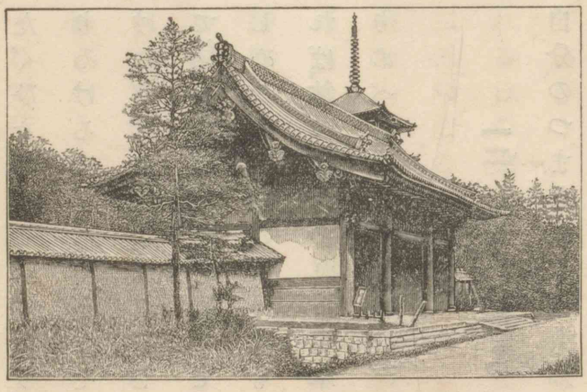
なしめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、或者のいふやう、「たとひ耳鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立てゝ引きたまへ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねをへだてゝ首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら拔けにけり。からき命まうけて、ひさしく病み居たりけり。

最明寺入道

平宣時朝臣老の後、昔語に、「最明寺入道、或宵の間に呼ばるゝ事ありしに、『やがて。』と申しながら、直垂の無くて、とかくせし程に、また使來りて、『直垂などの候はぬにや。夜なれば異樣なりとも疾く。』とありしかば、萎えたる直垂うち〳〵のまゝにてまゐりしに、銚子に土器取添へてもて出でて、『この酒を一人たうべんがさうざうしければ申しつるなり。肴こそ無けれ。人は靜まりぬらん、さりぬべき物やあると、何處までも求めたまへ。』とありしかば、紙燭さして、くま〳〵を求めし程に、臺所の棚に小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、「これぞ求め得て候。」と申しのしかば、「事足りなん。」とて、快く數獻に及びて興に入られ侍りき。その代にはかくこそ侍りしか。」と申されき。

資朝卿
日野大納言
後醍醐天皇に仕へて忠勤をはげみ隱岐に流されて遂に殺された
明治十七年從二位を贈られた

東寺
京都市下京區九條北
桓武天皇御創立
弘法大師開基
眞言宗の總本山



日野資朝卿

資朝卿、東寺の門に雨やどりせられたりけるに、かたはものどもの集りゐたるが、手も足もねぢゆが

イデン

み打ちかへりて、いづくも不具に異やうなるを見て、「とりくにたぐひなきくせものなり。最も愛するに足れり」と思ひて、まもりゐけるほどに、やがてその興盡きて、見にくゝいぶせくおぼえければ、「たゞすなほに珍しからぬものにはしかず」と思ひて、歸りて後、「この間植木を好みて、異やうに曲折あるを求めて、目を悅ばしめつるは、彼のかたはものを愛するなりけり」と、興なく覺えければ、鉢に植ゑられける木ども、みな掘棄てられにけり。さもありぬべき事なり。（徒然草）

阿部次郎
哲學者
東北帝國大學教授
明治十六年山形縣生

三　求め得る日

阿部次郎

自分のつまらぬことを知るものは上品の人である。下品の人は、つまらぬ者なることを知つて、依然としてつまらぬ儘に止つてゐる。嚴密に言へば、眞正に自覺せぬ者、眞正に碎かれざる者であらう。僕の心は未だ眞正に碎かれてゐない。眞正に碎かれる日の來るまで、僕はこの苦しい日夜を續けるのだ。

二三年前の夏、朝じめりする草を踏んで、高野の山を下つた。宿坊を出る時に、一箇月の馴染を重ねた納所さんは、柔かい白い餅に、細かに篩つた、稍〻青みを帶びた黃粉をつけて、途中の用意にと持たせてくれた。山を下れば食料の必要なき僕も、人の好意を無にせぬ爲に有難く之を受取つて、稍〻持て餘し氣味に風呂敷に包んで寺を出た。神谷の宿を出外れた岐路で、僕は自分の前を行く一人の乞食に追附いた。僕は咄嗟の間にあの餅を乞食にくれて荷物を輕くしようと思ひついた。乞食は其のきたない顏に美しい笑を見せて、丁度ひもじくつて弱つてゐる所でした。

ゲンミツ
シユクボウ
ナジミ
ナツシヨ
フロシキ
キロ
コシキ
トツサ

高野の山
和歌山縣の名山
古義眞言宗の大本山金剛峰寺の所在地

神谷
高野山から北へ四粁不動坂を下りた處

アイサツ
クリカエシ
ドウキ
ウエル
ケイケン

と、幾度も〳〵禮を言つた。さうして僕が輕く挨拶して通り過ぎる後から、繰返し〳〵嬉しさうに感謝の情を表した。僕は人に物をやつてあんなに嬉しがられた事がない。人から禮を言はれてあんなに嬉しかつた事がない。僕は自分の餅をくれた動機を考へて恥づかしくなつた。

僕は此の眞正に飢ゑた人を見て羨ましかつた。心の底から與へられた幸福を經驗する人を見て羨ましかつた。乞食は柔かい白い餅の返禮として、眞正に求むる者の幸福を僕の眼の前に突きつけてくれた。此の迷へる生活から逃れて、むしろ彼の乞食になりたいと思ひながら、僕は重い心を抱いて山を下つた。三年後の今日も僕はまだ眞正に求むる者の幸福を知らずにゐる。僕は與へられる日よりも寧ろ求め得る日を待ちかねてゐる。併し道草を食ふことの趣味に溺れたる者には、待ちかねる日は恐らく死ぬまでも廻つて來ないであらう。（三太郎の日記）

オボレル

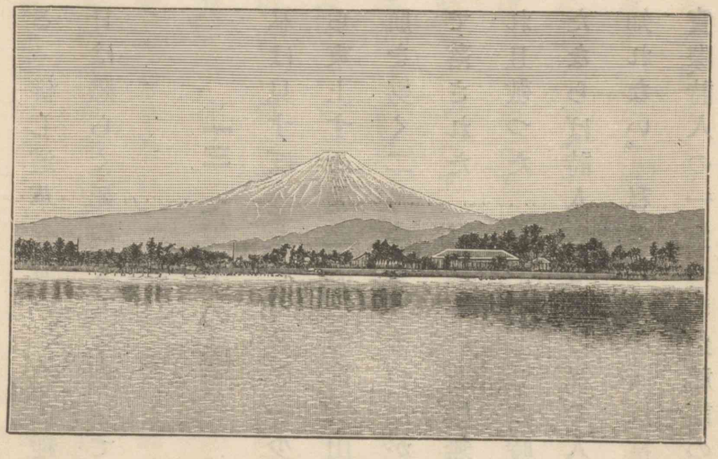
野口米次郎
詩人
英詩人
慶應大學教授
歐米に在ること三十餘年ヨネノグチとして知られてゐる
明治八年愛知縣津島町生
四日市
三重縣四日市津島から南へ二十八粁

一三　富士の靈

野口米次郎

私は見すぼらしい田舍の一少年として、はじめて船で四日市から東上する朝の海上に富士山を眺めた。あゝ、其の時……寒風肌を劈く二月の朝であつたが、私に對する自然禮讃の幕は切つて落された。私はこの莊嚴無比な神の表象を始めて見て、且畏れ且敬つた。私が若しこの時、富士山から詩の暗示を得なかつたならば、詩人としての私の人生は開かれて居らなかつたかも知れない。私の自然禮讃は富士山で始り、富士山で終つて居る。實際、詩人の一生は、自然禮讃の四文字に盡きて居る。

四年前
大正九年
觀音崎
横須賀市の東に突出てゐる岬三浦半島の東端で上總の富津洲と共に東京灣の



富士山

詩人として、私はいつも第一印象に支配される。自然の現象が、それ〴〵特殊の姿を見せるのは、始めて接する刹那に於てだ。私は十六歳の時始めて富士山を見てから今日に至るまで幾度富士山の姿を近くから、又遠くから眺めたかも知れない。四年前の渡米の際の事だが、船が觀音崎を離れて二三時間もたつと、薄い灰色の暮色が段々と濃くなつて行つた。甲

咽喉を扼してゐる

板に立つて見捨てた日本の空を遙かに眺めると、しよんぼり私を見送つて居るものがある。何物か。これこそ紫色に空をくつきり染抜いた富士山の圓錐體だ。時も時であるが、私は此の時位、遣る瀬ない、物寂しい、孤獨の感に打たれた事は無かつた。私は聲こそ出さなかつたが、滂沱たる熱涙を流した。又この時の富士山位、美の極致を暗示する、世にも尊い姿はなかつた。しかし私が目をつぶつて、心の中に富士山を描く時あらはれて來る姿は、私が十六歳の時に始めて接した富士山である。私は長い年月を外國で費したものだが、私の勇氣が急に挫けた時、われはお前を守護してゐる。恐れずに起て、起つて大空高く上らねばならぬ。と私に勢を附けてくれたものは、その富士山であつた。私が失望の闇の中に落ちて自分の進むべき道を知らなか

つた時、「われはお前を導いてやる。道は一筋だ……正義の道には努力の花が咲く。そこには神聖な空氣が滿ちてゐる。お前は復活せねばならぬ」と私を勵ましてくれたものは、その富士山であつた。「われは階段となつてお前を天に上らせよう」。「われはお前に教へて神祕の門戸をあけさせよう」。「われはお前を導いて祈禱の殿堂に這入らせよう」と語つて、私の守護神となつたのは、私が始めて眺めた富士山であつた。私はその富士山のお蔭で、その富士山の祝福を受けて、少くとも單純な心と高潔な思想とがどんなものであるかを理解して、詩歌の道を歩むことが出來た。私はそれを喜び、それに依つて生きて來てゐる。

私はこゝで私の忘れることが出來ない一挿話を語りたい。時は二十一二年前の冬で、場所は驚くべき霧が鯱か鮫のやうに跳

ビンヨン　Laurence Binyon (1869—) 英國の詩人美術批評家

ムーア　George Moore (1853—) 英國の詩人小説家戯曲家批評家

廻るといふ倫敦だ。私はこの薄氣味惡い、地獄の幾町目かとも思はれる倫敦の市中を、出版者から輕蔑された詩の原稿を後生大事に握りながらうろつき廻つた。或一夜、詩人ビンヨンに伴なはれて、詩人でもあり又美術家でもあるムーアの招待會へ出掛けた。その晩も私の心は暗かつた、冷たかつた。ビンヨンの言葉で出掛けるには出掛けたが、私は談話する勇氣さへ無かつた。私は私の詩を認めてくれない英國に對して烈しい反感を持つてゐたのである。ムーアの宅へ着くと、部屋には既に澤山のお客が集つてゐて、談話は岸を打つ海の潮の聲のやうに高まり、部屋の中は倫敦の夜のやうに煙草の煙で濛々として居つた。無名の私はあたかも鮠か諸子のやうに客と客との間を寂しく獨りで泳ぎつゝ、我ながら勇氣が無く、日東男子の沽券に關ると

北齋　葛飾北齋　江戸後期の浮世繪師　嘉永二年（一八五〇）歿　年九十

凱風　南風

東海より　"From the Eastern"

思つた時、私はふと部屋の壁の上に懸けてある北齋の富士を見た、……「凱風快晴」の一枚だ。代赭色の圓錐形を堂々と兀立せしめた木版繪だ。私は富士山が語るやうに感じた、「我を見て起て。西洋人を睥睨して東海詩人の面目を發揮せよ。恐れてはならない、慄へてはならない。我はお前に命令する。勇氣を出せ」。私は直に生氣が五體を震動させるやうに感じた。私は直に多辯になつた、私は直に快活になつた。その時から倫敦の濕面は笑ひ始めた、……私の詩集も世に出ることになつた。私は英國文壇に打勝つた。私はどの位、富士山に負ふ所があるか知れぬ。實際、私は富士山の守護で、少くとも詩人としての人生を開拓して來たといつても過言でない。私が英國での第一詩集「東海より」を富士の靈に捧げたのも、當然私が拂はねばならない敬意の一端を表示したものに外ならぬ。（ヨネノグチ代表詩）

荷田春滿　江戸時代の國學者　國學四大人の一　山城國伏見稻荷神社神職　元文元年（一七三六）歿　年六十九

賀茂眞淵　江戸時代の國學者　國學四大人の一　遠江國濱松生　明和六年（一七六九）歿　年七十三

タカネ

橘枝直　江戸時代の歌人　江戸生　天明五年（一七八五）歿　年九十四

一四　國のしづめ

荷田春滿

聞きしよりも思ひしよりも見しよりものぼりてたかき
山は富士のね

賀茂眞淵

するがなる富士の高嶺はいかづちのおとする雲の上に
こそ見れ

橘枝直

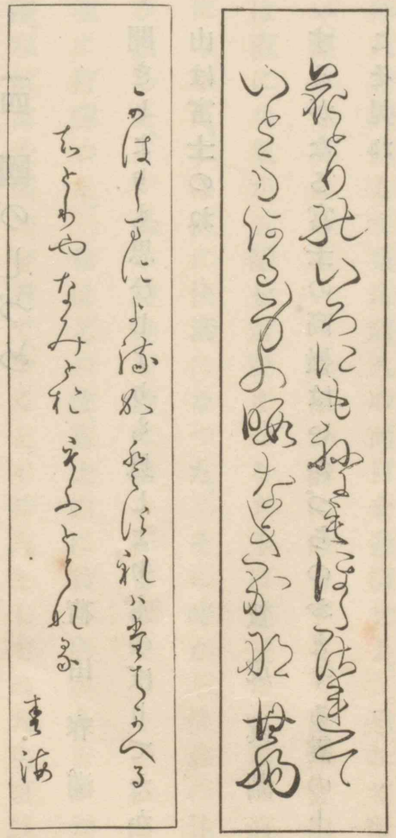
天のはらてる日のちかきふじのねにいまも神代の雪は
のこれり

橘千蔭
江戸時代の國學者で書家
枝直の子
江戸生
文化五年（一八〇八）
歿
年七十五

筆蹟
花とりのいろにもねにもほだされていとまある身の暇なきかな　無腸

筆蹟
川島によるかとすれば立返る千鳥や波と思ふどちなる　春海

上田秋成
江戸時代の國學者で作家
大阪生
文化六年（一八〇九）
歿
年七十八



上田秋成筆蹟

村田春海筆蹟

橘　千蔭

はこねぢや神のみさかをこえ來てもなほ富士の嶺は雲居なりけり

上田秋成

よろづよの國のしづめのふじのねをあふげばそらにうつしみのかみ

村田春海

こゝろあてに見し白雲はふもとにておもはぬ空にはるるふじのね

村田春海
江戸時代の國學者
江戸生
文化八年（一八〇七）
歿
年六十六

山路愛山
評論家
名は彌吉
靜岡縣生
大正六年歿
年五十四

神護景雲三年
稱德天皇の御代
（一七六九）

ケイエイ
ヤ
エゾ
セイインキヨウ
ケナケ
ハンラン
カンカ
シトウ

一五　武士道

山路愛山

神護景雲三年、朝廷警衛のため東人を召させ給ひし時の詔に、東人は、常に『額に箭は立つとも、背には立てじ。』といひて、君を一心に護るものぞ。」とあり。東國は蝦夷と境を接して、民族の生存競爭劇しく、戰爭なども多かりしゆゑ、自ら健氣なる風をも養成したるならん。蝦夷の叛亂聞えずなりし後も、天慶以來、幾度か干戈動き、大名・小名の私鬪も亦少からず。人氣自ら上國に異なり。

シヤクギ
メンモクリツ
キンク
オビヨウ
ヤクナン
モトドリ
シヨイ
アザケル
クヤシイ
キヨウム
ジタイ
モノイミ

石橋山　神奈川縣小田原町の西方にある山　治承四年源頼朝は大庭景親と此處で戰つて敗れた

かくて武士道といふもののもこの間に成長したり。武士道とは如何なるものぞや。一定の釋義を下すはむづかしきことなれども、まづは武士間に行はれたる面目律とも云ふべきものなり。されば武士道にて第一に禁句とする所は、臆病といふ事なり。頼朝は石橋山の厄難の時、日頃髻の中に隱しおきたる觀音の像を取出し、「我が首、若し大庭等の手に渡らん時、髻中に此の本尊のあるを見ば、源氏の大將の所爲に似ずとて嘲らるべし。それが口惜しければ、かくは取出し奉るものなり」と云へり。崇德上皇、爲義を白河殿に召させ給ひし時、爲義、昨夜の凶夢を陳べて、御味方たるべき仰辭退せんとしたるに、使の殿上人、「武將の身として、夢見物忌などは餘りに後れたる沙汰なり」といはれしかば、爲義「實にも」とて參殿に及びたり。

オクギ
キヅ
ケトツ
ヒケフ
フルマフ
ガウモノ

義平　源義朝の長子　平治元年(一八一九)歿　年二十　河　鴨河

宗旨も信仰も武士に取つては日常の事なり。一旦非常に臨んでは、唯何事も惑はず突進するが、武士道の極意なり。されば保元の亂に、重盛は「勅命を蒙つて罷り向ひたるものが、敵陣強しとて引返すべきやうやある」といきまき、平治の亂に、義朝は義平の敗軍を見て、「義平が河より西へ引きつるは、家の疵とおぼゆるぞ。今は何をか期すべき、討死せんのみ」といひて敵陣に馳突したり。臆病は弓矢の疵となるべきものなれば、寧ろ死すとも卑怯の振舞すべからずとは、武士道の第一義にして、神護景雲の詔に「額に箭は立つとも、背には立てじ」とあるものと同意なり。如何なる場合にも、逃げたりなど謂はれんは口惜し。「侍程の者が一度申さじと思ひ切りしことを、たとひ拷問せられたればとて申すべきやうなし」といふがごとく、何事も思ひ切つて、惡びれぬを武士

セイイン
カタン
ショリヤウアシド
ヨロシ
イキヂ
セイスイ
コウハイ
シユウジ
センジ
ダイリ

忠盛　平清盛の父　刑部卿　仁平三年（一一五三）卒　年五十八　家の子　平家貞

の魂とす。

次に、其の頃の武士道にて宗と重んじたるは、志の專一なることなり。尤も「大名は草の靡き」といふ諺は其の頃よりあり。強さうなる方に荷擔して、所領安堵を求むるは一般の習なりしかども、さりとて輿論はかく意氣地なきを善しとせしには非ず。主從の義を重んじ、志を主家に盡くすを以て眞の武士の面目とし、殊に主家の盛衰に從つて向背の態度を變ずるを以て醜事とし たり。されば源氏に從ふ武士は、「源氏に二人の主取ることなければ、宣旨なりとて、えこそ內裏へは參るまじけれ」といひし者もあり。「源氏の習、心がはりやあるべき」とて肩を怒らしゝ者もあり。「凡そ武士には二心を恥とす。殊に源氏の習は左樣に候」と力みし者もあり。平家に從ふ武士も、忠盛の家の子には「主君若

エンリヨ
マシテ
レイラク
シラガ
ダイ

平宗清　平頼盛の家臣　平治の亂に捕へられた頼朝を池尼に申して死を宥められるやうにした

屋島の內府　內大臣平宗盛　壽永四年（一八四五）薨　年三十九

し辱しめられたらんには、えこそ遠慮はすまじけれ。必ず殿上までも斬入らん」と決心したる者もあり。平宗清は頼朝の恩人にて、頼朝より「關東に來らば善く扶持せん」と言送りたれども、「平家零落の後、頼朝に參向する一條、尤も恥ぢ存じ候」といひ、直ちに屋島の內府に參り、運命を主家と共にしたり。齋藤別當實盛は「吉についてあなたへ參り、こなたへ參らんは見苦し。今は源氏の世盛となりたりとも、我は平家の味方となりて討死せん」とて、黑く染めたる白髮首を木曾義仲の士に取らせたり。

かく臆病を惡み、主人に忠志の專一ならんことを宗としたる武士道が、其の結果として死生を度外に置きたるは當然なり。東國武士が平家を西海に討ちし時、「病身ながら天下の重事なり。坐視すべきに非ず。とても死ぬる身ならば戰場に死なん」とて

吾妻鏡　鎌倉幕府の日記

池禪尼　平清盛の繼母　頼盛の生母

出陣したる者のことは、吾妻鏡にも見えたり。「事あらば眞先かけて命を主君に奉らん。弓矢執る身は、死すべき處を遁れぬれば、なか〳〵最期の恥あるなり」とて、腹搔切つて死したるは、其の頃の武士の習なれば、義朝も「合戰の場に罷り出でて何ぞ生命を存ぜん」といへり。されば頼朝が十四歳にして父擊たると聞きながら、自害をもせず、池禪尼にすがりて、かひなき生命を助りしを、時の人は善くも言はざりしなり。

此の外、其の頃の武士道にて殊に著しき一箇條は、人々互に功名を競ひたることなり。爲朝が白河殿にて、「我は親にも連るまじ、兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬやうに、たゞ一人いかにも強からん方へ差向け給へ。敵たとひ千騎もあり、萬騎もありとも、一方は射拂はんずるなり」と廣言したるは、最も善く武士の氣習を言ひあらはしたるものにて、佐々木・梶原の宇治川先陣なども其の一例なり。

佐々木　四郎高綱
梶原　源太景季

筆蹟　偶感
高稱興論一本衆愚、怪來政客多糊塗、中流屹立吐虹氣、則是人間大丈夫。
愛山逸民

偶感

高稱輿論本衆愚
怪來政客多糊塗
中流屹立吐虹氣
則是人間大丈夫

愛山逸民

山路愛山筆蹟

但し弓矢の道と云ひ、武士の道と云ふもの、畢竟自然に生じたる武士の面目律にて、多くは無意識の間に發達したるものなれば、此處までが武士道、此處までが武士道に非ずと、明かに區別を立て得べきものに非ず。さりとて其の面目律の制裁は、頼朝時代にてもなか〳〵嚴重にして、武士道に外れたるものは武士の間にては生きて居られぬ程なりき。

例へば、平治の亂に、源氏の士、藤原信頼を見限り、「此の殿は、人に頼を打たれて返事をだにしたまはねば、侍の主には叶ひ難し」と云ひしが如く、大將にして武士道の心得なければ、士卒附かず、侍にして名を惜まず、卑怯の振舞あらば、武士の間に齒せられざりき。而して此の武士道は東國に盛にして都には流行せず。都は柔弱者の寄合なりしが故に、天下の勢つひに上輕く下重くなりて、日本未曾有の大改革とはなりたるなり。

さりながら東國の武士が天下の主人となりたるは、獨り武士道の盛なりしが爲に非ず。保元以來、都に兵事多く、京洛の客往々四方に散じ、天下經營の知識に東國の武力を合併したるが故なり。近き世の薩摩の事も之に似たり。薩藩は武道の盛なる處にして、百二都城の健兒は勇氣に於て天下無比なりしかども、そ

ヒキヤウ
ミドウ
カイカク
キヨウラク
ゴウヘイ
ヒヤクニトジヤウ

島津齊彬
鹿兒島藩主
安政五年（一八五八）
薨
年五十

れだけにては天下に功を立つることもならざりしに、島津齊彬の祖父重豪、隱居して榮翁と稱せし人、薩摩の邊土にて武士の片意地なることを憂へ、天下の形勢をも知らしめんとし、勉めて上國の風を移しゝより、薩藩固有の武士氣質と上國の知識とは此に相合して、薩人始めて眼を天下の形勢に開くに至れるなり。東國の強きのみにては、なほ天下を圖り難し。賴朝は北條・三浦・千葉・小山など云ふ東國武士の力を假りたると共に、大江廣元・三好康信など云ふ京洛の客を愛し、其の經綸の知識を用ひたるなり。武士道も開化せざれば唯強きのみ。天下の形勢を辨へ知る知識と武士道との二味が調合して、始めて役に立ちしなり。

（愛山文集）

インキヨ
ヘンド
コユウ
ケイリン
ケヨウゴウ

重豪
鹿兒島藩主
天保四年（一八三三）
薨
年八十九

北條
四郎時政
建保三年（一二一五）
卒
年七十八

三浦
大介義明
治承四年（一一八〇）
歿
年八十九

千葉
介常胤
建久元年（一一九〇）
歿
年四十八

小山
小四郎朝政
曆仁元年（一二三八）
歿
年八十四

大江廣元
公文所別當
嘉祿元年（一二二五）
卒
年七十八

三好康信
問注所執事
承久三年（一二二一）
卒
年八十二

ハンニバル　Hannibal（前247—183）カルタゴの名將

矢野龍溪　名は文雄　新聞記者　全權公使諸陵頭に歴任した　嘉永三年（一八五〇）豐後國佐伯生

ロマ　Roma

諸邦　亞細亞の國

一六　ハンニバル

矢野龍溪

英雄の成敗は千古傷心の事少からずと雖も、東西古今を通じてハンニバルの事の如く甚だしきはあらざるなり。幼齡九歳の彼がその父に伴なはれて神卓の前に立ち、國讎たるローマを畢生の敵とすべきを誓はしめられてより其の終局に至るまで、一念常に國讎を報ずるに非ざるものなし。彼生まれて二十七歳人生の花とも稱すべき時、大兵を帥ゐて敵國に侵入してより以來十六年、苦を兵間に積み、曾て室家の樂しみを享けたる跡なし。大功成るに垂んとして果さず、ローマに窮追せられて諸邦の朝廷に流寓し、終に毒を仰いで斃る。嗚呼、人生の慘なる、復此の人の如きを見ざるなり。若し彼をして尋常人ならしめば亦深く悲しむに足るものなし。

カルタゴ　Carthago（Carthage）

然れども其の用兵の略は優に古今名將の上に出で、外交に敏に、政務に達し、賢に禮し、士に下り、學を好み、民を愛す。彼は武ありて文なき粗暴家に非ず、文ありて武なき文弱人に非ず、人格上一點の非議すべき所なく、而してその末路此の如し。是、特に人をして傷心に勝へざらしむる所以なり。

地中海を隔てゝ南北に對峙するものはローマ・カルタゴの二共和國なり。天は兩雄邦の並立を許さず。彼滅びずんば此興らず、彼衰へずんば此盛ならじ。ロ人は戰鬪を事とする尚武の民なり、カ人は貿易を主とする平和の民なり。カ人をしてロ兵と戰はしむるは、羊を驅つて狼に向はしむるが如し。況やハンニバルの事に當りしは、既に其の國が一たび痛擊を受けたる後なるをや。本國人の賴むに足らざるを知り、乃父の遺志を繼いで

イスパニヤ　España (Spain)
ピレネー　Pyrenees
アルプス　Alps

兵を屬領に募り、これを以て强敵に當らんとす、事固より既に非なり。彼豈これを知らざらんや。知つて而して是に出づる、また實に勢の已むを得ざるものあればなり。

ハンニバル

彼が志を決してイスパニヤを發するに臨み、其の兵幾ど十萬と號す。然れども、ピレネーの峻嶺を越えアルプスの難路を過ぎたりしとき、其の兵已に四分の一に減ず。彼がローマの北野に進みし時は、見兵僅かに二萬五千に過ぎざるなり。其の途上に於て兵士の怨嗟を聞くや、彼は寛大にも軍中に令して曰く、「去らんと欲するものは去れ、從ふことを樂しむものは來れ」と。

ゴール　Gaul

此の時に當りて將軍を棄てんとするもの數千人なりきと雖も、なほ二萬餘の兵は死生を共にせんことを誓へり。而して其の兵はイスパニヤ及びゴール北部諸種の蠻族より組成せるもののみ。決して夫の愛國心燃ゆるが如きロ兵の比にあらざるなり。蕪雜烏合の此の兵に對して、恩威の大なるものあるにあらざるよりは、焉ぞよく斯の如くなるを得んや。古今偉功を奏せし將帥を見るに、其の兵士は多く統一せる國民にして、愛國心あるものにあらざるはなし。唯それハンニバルに至つては即ち然らず。其の將士は其の將軍に對して單に恩威を感ずるのみ、實に愛國の要素を缺けり。此の異樣の兵を以て彼の將來印度以西を統一すべき運命を荷なへる勇壯絶倫、愛國無雙のローマ人に敵對し、一たびは幾ど之を壓服せんとしたるなり。嗚呼、此

アレクサンドル　Alexander the Great（前356–323）印度征服マで死したケドニヤ王のアレクサンドル大王

フレデリック　Frederick the Great（1712–1786）プロシヤ興したる大王

ナポレオン　Napoleon Bonaparte（1769–1821）歐洲全土を征服したフランス皇帝

カンネー　古代イタリヤ州の首府アプリヤ前二一六年ハンニバルは四萬八千の兵を以て羅馬軍を破つた

の人の外、千古復此の人あらんや。

獨り人品のみならず、其の戰鬪に長ずること亦古今無雙なり。アレクサンドル・フレデリック・ナポレオンと雖も其の上に出づるを得ず。是、余の私評に非ず、歐洲史家の通論なり。我が兵と敵兵と强弱勇怯既に懸絶せるのみならず、敵は毎に大兵にして、我は毎に寡兵なり。然るに猶奇戰には謀略を用ひ、正戰には戰術を用ふ。有名なるカンネーの大戰を見よ。彼の兵數は敵軍の半ばにも當らざりしに非ずや。しかも堂々たる正戰に於て、彼は巧妙なる戰術を用ひ、敵軍をして七萬の死屍を戰地に遺して潰敗せしめたり。斯の如き全勝は、歷史上實に希有の事なりとす。戰地に斃れたるローマ貴族の指より集めたる金の指環數斛を、彼の使が本國に齎し歸りてこれを國會に示せる時其の

國人の驚喜は幾何なりしぞ。此の大勝に乘じて直ちにローマを衝かざりしは、後人の憾むる所なりと雖も、其の兵やもと甚だ多からず、加ふるに戰後の疲憊を以てす、此の危道を行かずとも、一方に於てイタリヤ南部の城邑は遙かに欵を送る勢あり、彼を捨て此を取る亦理なしとせんや。此の戰の夕、一部將が「我に三千の騎兵を與へよ。將軍の爲に直ちにローマを衝き、二日を出でずして將軍をローマの城中に晩食せしめん」と獻策せし時、彼既に其の得失を知る、必ずしも後人の非議を俟たざるなり。彼の國人は必要大切の場合にも、曾て十分の援兵を彼に送りしことなく、十分の金穀を彼に與へしことなし。是、彼が十六年間敵國を蹂躪しながら、遂に其の成功を最後に誤りし大原因なり。實に本國人民の罪にして彼の罪にあらず。かくの如くにして

彼は十六年間自ら兵を他國に募りて其の缺を補へるのみならず、其の金穀も常に之を敵國に取れり。其の忍耐の大なる、亦其の智略と並行すと謂ふべし。

彼は善く戰へり。彼は巧みに外交を操縱せり。然れども其の本國は却て敵の侵入を防ぎ得ず、勢の救ふべからざるに及んで彼を召喚して之に當らしむ。嗚呼、亦遲し。彼の智勇も之を如何ともする能はず。しかも猶此の存亡の秋に在つて敵と講和の約を結び、國人をして小康を得しめ、一方には財政を釐革し、一方には憲法を修正し、下層人民の愛國心を涵養し、國帑の急を緩め、莫大なる償金を年々收辨し得る途を畫策せり。彼豈尋常の一武弁ならんや。彼をして平時に出でしめば、必ずや治平の良宰相たらん。

ハスドルバル Hasdrubal（一前203）カルタゴの勇將

出レ師未レ捷　唐の詩人杜甫が諸葛亮を詠じた詩句

五丈原　諸葛亮の本營のあつた處　陝西省鳳翔縣にある

武侯　諸葛亮　蜀漢の忠臣

其の未だ本國に召喚せられずしてローマの野に轉戰するや兵寡く食竭く。恢復の望は單に懸りて其の實弟ハスドルバルがイスパニヤより援軍を率ゐて來り合するにありしなり。然るに天は衰邦に祚せず、彼の弟はイタリヤの北野に破られ、彼が手を握りて久別の喜を敍せんと樂しみし其の人の首級は、敵の槍鋒に貫かれて、遙かに彼が營前に現れたり。嗚呼、人生悲慘の事多しと雖も、未だ此の人の此の時の如きはあらざるなり。

彼が遙かに弟の首級を望みけるとき、「我今カルタゴの運命を知れり」と歎ぜし一言は、如何に無限の悲痛を含みしぞ。尋常骨肉の情よりするもなほ忍ぶ能はず、況や自國の興亡は此の援軍の勝敗に懸れるをや。史を讀んでこゝに至り、卷を掩うて長嘆せざる者果して幾人かある、「出レ師未レ捷身先死」の五丈原頭の武侯

餘杭　今の浙江省杭州府

岳武穆　岳飛　宋の忠臣

や、盡忠報國の黥文を露して餘杭の市に斬られたる岳武穆も、亦何ぞ比するに足らん。

彼の戰略戰術が人目を眩耀するがために、人或は其の名將たるを知つて其の人格を察せず。若し能くこれを究めば、其の不幸を悲しむ情、轉〻深きを加へん。千古傷心の事、實に此の人の一生の如きはあらざるなり。（戰時畫報）

一七　アルプスの夏

槇有恆

槇有恆　登山家　明治二十七年新潟縣長岡市生

初夏の滴る喜を心行くばかりに吸はうとするならば、アルプスまで登らなければならない。アルプスは見果てのつかぬお花畑の夢幻郷だ。足の踏み所もない程に咲く草花に身を横たへて雪山を仰いでゐると、森ばたに栗鼠が音を立てゝゐる。誠實

サン、ミカエル祭　Saint Michaelmas Day　九月二十九日に行はれるローマ教會の一大祭

な生活のかはゆらしい音だ。牛の群がまた登つて來る。アルプスの草を追つて村から來るのである。一體アルプスといふ語は土地の人たちの間では夏期に放牧する雪線以下の山麓の意味に用ひるのである。山の裾の村人は、生活の必要物として牛や羊を持つ。主として牛が大多數を占めてゐるが、數多く持つてゐる者もあれば、又少いものもある。何れにしても、彼等は晩春から雪の降りだす九月下旬、大抵九月二十九日のサン、ミカエル祭を最終として、各自所有の頭數だけ此

アルプスの牧場

のアルプスに牛を放牧することが出來る。

山村が積雪から自由になつて、山麓にも若萌えが芽ざす五月の下旬、長らく待焦れたアルプス行の日が來る。其の日には、牧夫は黑の天鵞絨に赤緣を取つたチョッキを身に着け、皮の帽子を被つて先頭に立つ。次に山羊が二三匹續き、その後に年長の牛が大鈴を頸に下げて續く。此の鈴は農夫が家寶として誇るものであつて、古いのになると中世紀ごろのものがある。大きいのは直徑七八寸もあつて、多くは眞鍮で出來てゐる。外側にはエーデルヴァイスの浮彫などがあつて、一種の風韻を具へてゐる。それを幅の七八寸もある厚い皮の帶に下げて牛の頸に懸ける。此の先達牛の後に、十頭も二十頭も牛が續く。此の頃になると、村の道は毎日此の牛連れの行列で賑はひ、鈴の音は朝ま

エーデルヴァイス　高山植物の一種　みやまうすゆきさう　Edelweiss

だきから響き渡る。そして牧夫や牧童は紐の長い鞭を高く空に鳴らしつゝ、道草を食ふ牛どもを促して登つて行く。

青い空を戴き、雪の連峯を前にして、お花畑の上に歌つたり想つたりしてゐることの美しい時よ。谷よりそよぐ風は遙かなる牧童の歌を夢幻の中に送り、山々は險しい面持をもつて人の胸に肉薄する。何といふ莊嚴な造化であらう。

六月も半ばを過ぎて、アルプスを渡る風の烈しさも和らいで來ると、峠の茶屋や展望の山のホテルなどは一齊に戸を開き、竈の煙を揚げて訪ふ人を待つ。登山鐵道も山麓の傾斜面を這ひだして上下する。リュックザックを擔つた男女の群は、アルペンローゼを帽や胸にかざして峠から峠へと歌つてあるく。皆强い高山の氣に打たれて、腕も顏も赭い。アルペンローゼに二種

リュックザック　獨逸語で背嚢の義　登山に用ひる雜嚢　Rücksack

アルペンローゼ　Alpenrose

類あるが、何れも赤い花の咲く石楠花(しゃくなげ)である。二つとも殆ど同じであるが、一方の葉は綠が若く、毛を持つてゐて、花が早く咲く。雪の高嶺の裾、荒々しい斷崖の端のあたりに群がり咲く此の可憐な花は、まことに詩に歌に詠まるべき美しい姫君である。しかも、ローゼとはいひながら、刺す刺も無ければ、平地の人に馴れて養はれる媚も持たぬ。何時も胸深く悲しみを祕めてゐる。そして人の世に植替へられると、愛撫の日をも喜ばず、異鄕の土

アルプス登山

ティロール　オーストリヤの最西部の州の名　Tirol　東アルプス一帶の地方

に故鄕の山を想うて焦れ死にに死んでしまふ。たゞ山にある日のみ彼の花に幸は深く淸い大氣を吸うて美はしい面ざしをしてゐる。

櫻かざして若人の幸を歌うた昔もなつかしいが、ティロール帽に差した一枚のアルペンローゼに命の喜を思うて山路を歩むのも樂しい。

日影が北面の峯から全く逃れて、朝から谷一面に照りつけるやうになれば、牧草も林も新綠が燃えるやうな瑞々しさになる。天鵞絨のやうにアルプスを蔽ふ牧場の綠に見入つてゐる眼には限りない麗はしさが映る。何處を見ても荒廢の跡がない。滴るやうな若さだ。しかし黃金の光の雨降る日のみではない。地上が餘りに甘い喜に浸る時は、自然は必ず肩を聳かし、聲を怒

フェーン Föhn 三四月の頃及び十月頃アルプスに吹く强風

らかして威嚴を示す。フェーンの疾風に乘つた雲の群が峯に溢れて狂ひ叫ぶ時は、我等は命懸けだ。たゞ其の狂暴な意志の奔放を、小さくなつて見守つてゐるより仕方がない。

アルプスの高峰マテルホルン

しかし夏の間山村を一しきり搖がして忘れたやうに通り過ぎる驟雨は、倦怠を掃ひ去つてくれる。夕立雲は前山の頂に涌きあがつたかと思ふ間に、雪の山に當つて卷きかへる。今まで陽氣であつた谷も光を失つて、空の御機嫌を伺つてゐるやうだ。その内に恐しい强い雷鳴が、峯から峯へ、崖から崖へと縱横に駈廻つて轟く。

エーテヤ Ather 氣

豪雨だ。見る間に雲の下に露れた崖に大きな瀑布が幾筋もしぶきを飛ばして、どう〳〵と落下する。山おろしの風が颯々と唐檜や森や村の上を渡る頃は、雨しぶきも薄らいで、雷鳴は氷河の奥の方で迷つてゐる。谷には霧が昇騰し始める。小鳥が待ちかねたやうに囀る。驟雨は過ぎたのだ。雲の間から日光が矢のやうに射て牧場を照らす。綠の焰だ。瀑布も細つて跡がまた消える。農家からは紫煙が緩やかにのぼる。忠實な妻女が夫や子供の夕食の支度をしてゐるのであらう。雨後の空氣は十分に濕氣を含んで柔かい。しかも爽かな匂が溢れる。若芽の香、靜寂な森のつく呼吸、はちきれさうな土の誘惑、そのエーテヤの中を、美しい小鳥の聲と牛の鈴の音とが天使の歌のやうに舞ふ。

日は西の山に沒した　川霧は立昇つて何處よりともなく集り、森の上にたなびく。谷と村とには靜かな暮の藍色が濃くなつて行く。その時である、頂と云ふ頂が悉く日を浴びて赫々と燃えるのは。焰なき、熱なき火だ。目が覺めるやうな透明な赤だ。微動すらしない沈みきつた色だ。その赤が次第に下から昇る紫に追はれて行く。そして紫より藍へと移つて、遂には頂の一點のみが映える。

喜より沈思に、そして遂に憂鬱に移る。これが山の夕映である。

（山行）

一八　登臨賦

島崎藤村

高嶺に登り、まなじりを

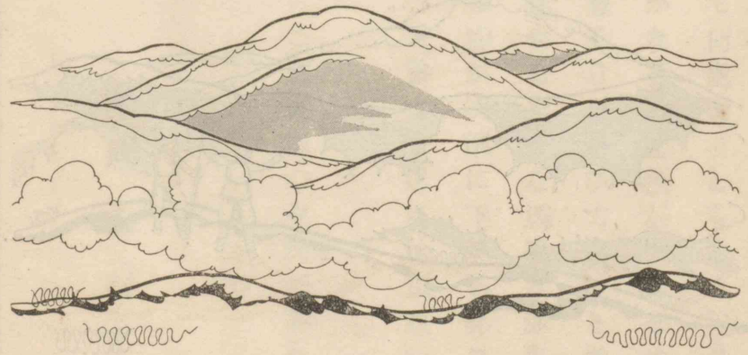
島崎藤村
詩人
小説家
名は春樹

明治五年長野縣
木曾生

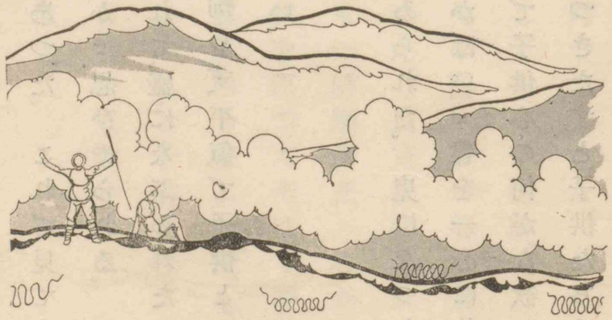
大山祇
山を掌る神

きはめて望み眺むれば、
わがゆくさきの山河は、
目にも朗らに見ゆるかな。
みそらを凌ぐ雲のみね、
くだけて遠く靑に入る。
こゞしく奇しき磐が根の
つらなりわたる山脈は、
海にきほへる高潮の
驚き亂れ涌くごとく、
大山祇もゆるぎ出で、
わがたましひを奪ふかな。
誰かは譏り、誰が恨む。

翅をのぶるはやぶさは、
虚しき天の戸を衝きて
高きみ空にかけれども、
打振り打振る羽袖だに
引きとゞむべき雲もなし。
遠く緑におほはれて、
望をつゝむ野の方に、
ひがしに下る河波の
ゆくへを見れば、紫の
山の麓をうちひたし、
滔々として流れ去る。
あゝ大空に風吹けば、



雲おのづから飛ぶ如く、
迷の霧にこめられし
暗き谷間をあゆみ出で、
高嶺にあれば、時を得て
はるかにあがるわが心。
顧みすれば、越えてこし
山はうしろに落入りて、
荒れにし森の影もなく、
寂しき野邊も見えわかず、
日の照らすとも七重八重、
わが故郷は雲にかくれて。（藤村全集――夏草）



ホレル

北原白秋
詩人
歌人
名は隆吉
明治十八年福岡縣柳河町生
良寛禪師
江戸後期の歌僧
越後國出雲崎生
天保二年（一八三一）寂
年七十五

一九　童心

天
沒我

北原白秋

越後の良寛禪師は童心の持主であつた。一に童男童女、二に手毬、三におはじき、これが禪師の三好きであつた。これで見ても良寛樣がどんなに子供が好きであつたかゞ思ひやられる。その良寛樣も子供たちには隨分馬鹿にされて、盛になぶられたりからかはれたりしたらしい。それにも拘らず、平氣で子供と一所懸命に遊び惚れてゐた良寛樣が有難い。

或時、例の通り、子供とかくれんぼをしてゐられた。鬼になつた良寛樣が目を瞑つて、「もういゝよ。」といふかはいゝ聲を一心に待受けてゐられる。と丁度日のくれどきで子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がちら〳〵つきだすと子供たちは急に遊をやめて一人殘らずこそ〳〵と歸つて了つた。そこは子供だから良寛樣も何もうつちやらかしである。無論、いくら待つても「もういゝよ。」といふ者はない。その內に日が暮れ、長い夜が來た。さうして到頭夜が明けて了つた。良寛樣はそれでも一所懸命だ。心から目を瞑つてやはり同じ處に同じ姿した儘、「もういゝよ。」と子供が呼ぶのを待つてゐられた。その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

良寛（遍澄筆）

また或時のことである。良寛樣が今度は隱れる事になつた。

イナムラ

アハテル

そこで見つけられては大變だといふので、早速、田圃の稻叢の中にもぐり込んで、それはかはいらしいことだ、それは〳〵小さくなつて、まるで二十日鼠見たやうに頭からすつぽりと稻藁を被つて、おど〳〵してゐた。すると子供たちはまた例の通り一人殘らずこそ〳〵と歸つて了つたのである。それを良寛樣は少しも御存知がない。また日が暮れて、夜が來て、また夜が明けた。稻叢には霜が眞白に置き、朝日が昇り始めると、百姓がやつて來て何の氣もなく稻束をやにはにはづすと、「おやつ」と驚いた。良寛樣が小さくなつてもぐつてゐられるではないか。「おや良寛樣が」といふと、慌てゝ「靜かにしろ、靜かにしろ。子供が見つける」。その心のあどけなさ、ありがたさ。

無邪氣

カケモノ
イリマメ

ホメル

ヒダ

デンシ
テンシンランマン

或日、その良寛樣が男の子や女の子たちとおはじきをしてゐられた。沙門良寛全集に「禪師頗る大勝を博して賭物の煎豆を多く得」と書いてあるから、餘程の乘氣であつたらしい。丁度その時誰かゞ入つて來た。そして「おや〳〵良寛樣、なか〳〵あなた樣はおはじきがお上手で」と褒めると、罪のないこと、良寛樣はぽうつと面を赤くして、まるでおぼこ娘見たやうにさも〳〵恥づかしさうにそつとその煎豆を膝の下に押しかくしたといふ。その心の初々しさ、そのきまりのわるさ、恥づかしさは、全く佛の前に子供らしくおとなしく身をへりくだる心である。尊い聖心は凡てこの童心を源にする。

禪師がいかに天眞爛漫であつたかもう一つお話する。

ハフ

サルカニガッセン

或時、赤々と實が熟れて鈴なりになつた柿の木の下で、小さな子供が一人泣いてゐた。良寛樣が通りかゝつて「どうしたんだ」と圓い頭をさすつてやると、「あの柿が食べたい」と云ふ。「よし〳〵、それではわしが取つてあげる、泣くんでないぞ」といひながら、やつとこさと木に這ひあがつた。枝につかまつてあれかこれかと探してゐるうちに、それは全くうまさうな柿の實だ、一つ取つて口をつけると、それがおいしいのなんの、良寛樣は夢中になつて、かじるはかじるは、まるで猿蟹合戰の赤いお猿のやうにむしやむしやと食べ惚れてゐる。下にゐる子供こそあはれである、それを見て火のついたやうに泣き叫ぶと、始めて良寛樣氣がついた。さあ、しまつた、これはといふので、慌てゝ枝をゆすぶつたといふお話。

チンポヒン

ーラム
カヒイ
サガス
ンンパイ
ンヤウデン
タ、ヅム
オレ

思うてもその慌てかたのをかしさ、罪のなさ、眞正直さ、その子供らしさ、まつたく涙がこぼれるほど嬉しいではないか。

禪師の玉のやうなこの童心は榮藏と云つた童の昔その儘である。それは何物にも代へ難い、二つとない尊い天稟である。まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。或日父親からひどく叱られたので、つい上目をした。そこでまた〳〵叱られた。「親を睨むやうな奴は、鰈になるぞ」。これを聞いた良寛樣の榮坊は外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ、家内中大心配であちらこちらと搜しまはると、ある濱邊の岩の上に、悄然と佇んで沖の方ばかり眺めて居た。「榮坊どうした」といふと、榮坊曰く、「俺、まだ鰈にならないか」。

鰈になるといはれたので、ほんとに鰈になると思つて、一心に海を凝視めて顫へて居た童心の正直さ。これをこそ生一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。聖心はこの童心を源とする。（洗心雜話）

小林一茶
江戸後期の俳人
信濃國柏原生
文政十年（一八二七）歿
年六十五

二一〇　幼兒

小林一茶

こぞの夏、竹植うるころ、うき節しげきうきよに生まれたる娘、ものにさとかれとて名をさとゝよぶ。今年誕生日祝ふころほひになり、手うち〳〵、あはゝ、あたまてん〳〵、かぶり〳〵ふりながら、同じき子供の風車といふもの持てるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみに取らせけるに、やがてむしや〳〵しやぶつて捨て、露ほど執念なく直ちに外の物に心移りて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それも直ちに倦みて、障子の薄紙をめりめりむしるに、「よくした、よくした」と賞むれば、まことゝ思ひ、けら〳〵と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきらきらしく清く見ゆれば、なかなかに心の皺を伸しぬ。

又、人の來りて「わん〳〵はどこに」といへば、犬に指さし、「かあかあは」と問へば烏に指さ

筆蹟
良夜姨捨雨
十五夜もたゞの
山なり秋の雨
おどる夜やさそ
ひ出さるゝ庵の
笠
玉になる欲はあ
るなり草の露
一茶

アイキョウ
ヨケヨウ

カンゲン

二十五菩薩　觀音勢至などいふ二十五の菩薩阿彌陀佛を念ずる者の臨終には紫の雲の上に音樂が聞えて二十五菩薩が來迎するといふ

すさま、口もとより爪先まで愛敬こぼれてあいらしく、春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覺ゆる。

折から門に月さしていと涼しく、外にわらべの踊の聲のすれば、たゞちに物投げすてゝ、片ゐざりにゐざり出でて、聲をあげ手眞似して嬉しげなるを見るにつけ、いつしかかれをも振分髪のたけになして踊らせたらんには、二十五菩薩の管絃よりもはるかにまさりて興あるわざならんと、我が身に積る老を忘れて憂さをなんはらしける。

かく日すがら牡鹿の角のつかの間も手足を動かさずといふことなくて遊び疲るればにや、朝は日のたくるまで眠る。そのうちばかり母は飯炊ぎ、そこら掃きかたづけて、やがて閨に泣聲のするを目の覺むる合圖と定め、手かしこくも抱き起して、乳房あてがへば、すぱ〳〵と吸ひながら胸板のあたりを打敲きて、にこにこ笑ひ顏をつくるに、母は長き胎内の苦しみも日々の襁褓の穢はしきも打忘れて、手の中の玉と撫でさすりて一入喜ぶなりけり。

ムツキ
ケガラハシイ

山上憶良　奈良時代の歌人　天平五年（一七三三）歿　年七十四

僧正遍昭　平安時代の歌僧　俗名は良岑宗貞　六歌仙の一　寛平二年（一八九〇）寂　年七十六

蚤のあとかぞへながらに添乳かな　（一茶全集）

二　兒なくらむ

山上憶良

おくらゝは今はまからむ兒なくらむそのかの母もわを待つらむぞ

僧正遍昭

たらちねはかゝれとてしもうばたまのわが黑髪を撫で

ずやありけむ

菅原道眞母

ひさかたの月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな

藤原兼輔
平安時代の歌人
承平三年（一五三）卒
年五十七

藤原兼輔

人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道にまどひぬるかな

小式部内侍
平安時代の歌人
橘道貞の女
母は和泉式部

小式部内侍

いかにせむいくべき方もおもほえず親にさきだつ道を知らねば

小澤蘆庵
江戸後期の京都の歌人
享和元年（一八〇一）歿
年七十九

小澤蘆庵

父母のたびなるわれをおもふらむまつらむさまのおもかげに見ゆ

松平定信
奥州白河の城主
江戸後期の和漢學者
文政十二年（一八二九）卒
年七十二

松平定信

うづみ火のあたりのどかにはらからのまとゐせし夜ぞこひしかりける

加納諸平
江戸後期の和歌山の歌人
安政四年（一八五七）歿
年五十二

良寛

霞立つ長き春日を子どもらと手毬つきつゝこの日くらしつ

大隈言道
江戸後期の筑前の歌人
明治元年歿
年七十一

加納諸平

あげまきがうかるゝ聲も面白しふれ〳〵こ雪山つくるまで

大隈言道

かへり來てねたる童のたもとよりこぼれいでたる花菫

コウフン
シユウカン
カン
カイシヤク

芥川龍之介
文學者
東京生
昭和二年歿
年三十六

瀧澤馬琴
名は解
通稱は清左衞門
小說家
曲亭馬琴と號す
嘉永元年(一八五八)
歿
年八十一

崖山
渡邊登
憂國者
畫家
三河國田原藩士
天保十二年(一八四〇)自殺
年四十九

かな

戲曲を作る爲心身を全く此に集中する。

三　戲作三昧

芥川龍之介

崖山が歸つた後で、馬琴はまだ殘つてゐる興奮の力に、八犬傳の稿を續けるべく平生のやうに机へ向つた。先を書續ける前に昨日書いた所を一通り讀返すのが彼の昔からの習慣である。そこで、今日も彼は、細い行の間へべた一面に朱を入れた何枚かの原稿を、氣を附けてゆつくり讀返した。

すると、何故か書いてあることが自分の心持とぴつたりしない。字と字との間に不純な雜音が潛んでゐて、それが到る處で全體の調和を破つてゐる。彼は最初それを彼の癇が亢ぶつてゐるからだと解釋した。

オレ
ロウベイ
セツレツ
フケ
ランミヤク
エイドウ
ジヨケイ
エイタン

「今の俺の心持が惡いのだ。書いてあることは、どうにか書切れる所まで書切つてゐる筈だから」。

さう思つて彼はもう一度讀返したが、調子の狂つてゐることは前と一向變りがない。彼は老人とは思はれないほど心の中で狼狽し出した。

「このもう一つ前はどうだらう」。

彼は其の前に書いた所へ眼を通した。するとこれも亦徒に粗雜な文句ばかりが雜然として散らかつてゐる。彼は更に其の前を讀んだ、さうしてその前の前を讀んだ。

しかし讀むに從つて拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して來る、そこには何等の映像をも與へない敍景があつた、何等の感激をも含まない詠嘆があつたさうして又何等の

リロ
ロンヤン
ジヤウテツ
クツウ

イマ

弓張月
鎭西八郎爲朝の一生を敍した小說　三十卷

南柯夢
人情小說　十四卷

理路をも辿らない論辯があつた。彼が數日を費して書上げた何回分かの原稿は今の彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は急に心を刺されるやうな苦痛を感じた。

瀧澤馬琴

「これは初めから書直すより外はない。」

彼は心の中でかう叫びながら、忌々しさうに原稿を向ふへ突きやると、片肘ついて、ころりと横になつたが、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼は此の机の上で「弓張月」を書き、「南柯夢」を書き、さうして今は「八犬傳」を書いた。この上にある端溪の硯、蹲螭（そんち）の文鎭、蟇の形をした銅の水差、獅子と牡丹を浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、さういふ一切の文房具は、皆久しい以前から彼の創作の苦しみに親しんでゐる。それらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな、彼自身の實力が根本的に怪しいやうな忌まはしい不安を禁ずることが出來ない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絕した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると人並に己惚の一つだつたかも知れない。」

かういふ不安は、彼の上に何よりも堪へ難い落莫たる孤獨の情を齎した。

ブンケン
ガマ
ミヅサシ
ボタン
ケンヒヨウ
ソウサク
ブンボウグ

ヒリン

ウスボレ
ラクバク
コトワ
モタラシタ

八犬傳
里見の臣八犬士の忠勇によりて主家を安房上總に再興する由を仕組んだ歷史小說
一部百六卷
二十八年を費して成る

端溪
中華民國廣東省廣州府の東にある溪古く名硯を產した

ケンソン
セツ〳〵
ゴウマン
フンン
イッコ
ヒナン
ジャウネツ
ナンパセン
ゲンコウ
デッポウ
フスマ
クビ
ユウウツ

遼東の豕

遼東有レ豕、生ヒ子白頭、異而獻之、行至二河東一、見二群豕皆白一、懷レ慙還。（後漢書）

彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には常に謙遜であることを忘れるものでない。が、それだけに、又同時代の屑々たる作者輩に對しては傲慢であると共に飽くまでも不遜である。その彼が結局自分も彼等と同じ能力の所有者だつたといふことを、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふことを、どうして易易と認められよう。而も彼の強大な「我」は「悟り」と「諦め」とに避難するには餘りに情熱に溢れてゐる。彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難破船の船長のやうな眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戰ひ續けた。若し此の時、彼の後の襖がけたゝましく開け放されなかつたら、さうして、「お祖父樣只今」といふ聲と共に、柔かい小さな手が彼の頸へ抱附かなかつたら、彼は恐らく此の憂鬱

自分ではずれた物であると思ふ事居るのに他人から見るとそう思へない

ダイタン
ソツケヨク
ヒダ
シワ
ニギヤカ
セガレ

な氣分の中に何時までも鎖されてゐたことであらうが、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供だけが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よく飛上つた。

「お祖父樣只今。」

「おゝ、よく早く歸つて來たな。」

この語と共に「八犬傳」の著者の皺だらけな顏には、別人のやうな喜が輝いた。

茶の間の方では、癇高い妻のお百の聲や、內氣らしい嫁のお路の聲が、賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から、悴の宗伯も歸り合はせたらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましでもするやうに、わざと眞面目な顏をして天井を眺めた。外氣にさらされた頰が赤くなつて、小さな

モンツキ
トツデン
エクボ
ビンヨウ

栗梅　少し濃い栗色

鼻のまはりが息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父樣にね」。

栗梅の小さな紋付を着た太郎は、突然かう言出した。考へようとする努力と笑ひたいのを怺へようとする努力とで、靨が何度も消えたり出來たりする。それが馬琴には自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日」。

「んう、よく毎日？」

「御勉强なさい」。

馬琴は到頭噴き出した。しかし、笑の中ですぐ又語を繼ぎながら、

「それから？」

カンシヤク
イトビンヤツコ
クスグつた

絲鬢奴　頂を廣く剃り左右の鬢の毛だけを結んだ奴

「それから、えゝと。癇癪を起しちやいけませんつて」。

「おや〳〵それきりかい」。

「まだあるの」。

太郎はかう言つて、絲鬢奴の頭を仰向けながら、自分も亦笑ひ出した。眼を細くして白い齒を出して、小さな靨を寄せて笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて世間の人間のやうな憐むべき顏にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の意識に溺れながら、こんなことを考へた。さうして、それが更に又彼の心を擽つた。

「まだ何かあるかい？」

「まだね、いろんなことがあるの」。

「どんなことが？」

シンボウ

イタヅラ

「えゝとお祖父様はね、今にもつと偉くなりますからね。」
「偉くなりますから？」
「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」
「辛抱してゐるよ。」
馬琴は思はず眞面目な聲を出した。
「もつと、もつと、ようく辛抱なさいつて。」
「誰がそんなことを言つたのだい。」
「それはね。」
太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た、さうして笑つた。
「だあれだ？」
「さうさな、今日は御佛參に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

ダンゼン
モタゲル
アゴ

ゲンシユク
セツナ

刹那
Ksana
梵語
極少時間

「違ふ。」
斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げながら、頸を少し前へ出すやうにして、
「あのね。」
「んう。」
「淺草の觀音樣がさういつたの。」
かういふと共に、この子供は家内中に聞えさうな聲で嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛退いた。さうして、うまく祖父をかついだ面白さに、小さな手をたゝきながら轉げるやうにして、茶の間の方へ逃げて行つた。
馬琴の心中に、嚴肅な何物かゞ、刹那に閃いたのは此の時である。

クチビル
ジョウダン
ウナツク
子供の言を眞實不虛不捷
馬、推枕軒中聽レ雨眠。
（元僧熙晦機）

芳流閣
足利成氏の古河城に須見のために建てた三層樓といふ
禍福は糾ふ纆
禍之與レ福兮何異二糾纆一（漢書）
人間萬事
人間萬事塞翁ガ不レ知二其極一。（老子）
禍福之所レ倚、福兮禍之所レ伏、
禍兮福之所レ倚、福兮禍之所レ伏、
執知二其極一。（老子）

彼の唇には幸福な微笑が浮んだ。それと共に、彼の眼には何時か涙が一杯になつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふ所でない。この時この孫の口からかういふ語を聞いたのが不思議なのである。

「觀音樣がさういつたか。勉強しろ、癇癪を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ」。

六十何歳かの老藝術家は涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。（芥川龍之介全集—傀儡師）

二三　芳流閣

瀧澤馬琴

古の人謂はずや、「禍福は糾ふ纆の如し」。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所、はた禍の伏す所。彼にあ

ユイゴン
カンク
アマタ
オンシヤ

犬塚信乃
八犬士の一人名は戌孝孝の字の玉を有す
古河
下總國結城郡古河町
古河公方足利成氏の居つた處
村雨
信乃の父犬塚番作が成氏の兄春王より預つた名刀
信乃の知らぬ間に惡漢にすりかへられたもの
犬飼見八
八犬士の一人信の字の玉を有す

れば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極を知らん。憐むべし、犬塚信乃は親の遺言、記念の名刀、心にしめつ身につけつ、艱苦の中に年を經て、得難き時を得てしかばはるゞ〳〵古河に齎して、名を揚げ、家を興すべかりしその福は禍とふりかはりたる村雨の刀は舊の物ならで、わが身を劈く讐とぞなりし憾をこに釋く由もなく、事急にして、意外にあり。纔かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥多の圍を切開きて芳流閣の屋の上に登れども、とにかくに脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を窮めたる心の中はいかなりけん、想ひやるだにいと痛まし。されば又犬飼見八信道は犯せる罪のあらずして月頃獄舍に繫がれし禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞ懸る捕手の役義。犬塚信乃を搦めよとて懋に擇み出されつ。他の憂を身

ロウカク　ウカハフ　イネウ　ショウヰ

まぶし　獵師が柴など折りかけて身を被ひかくすもの
成氏朝臣　古河公方足利成氏
横堀史在村　成氏の老臣

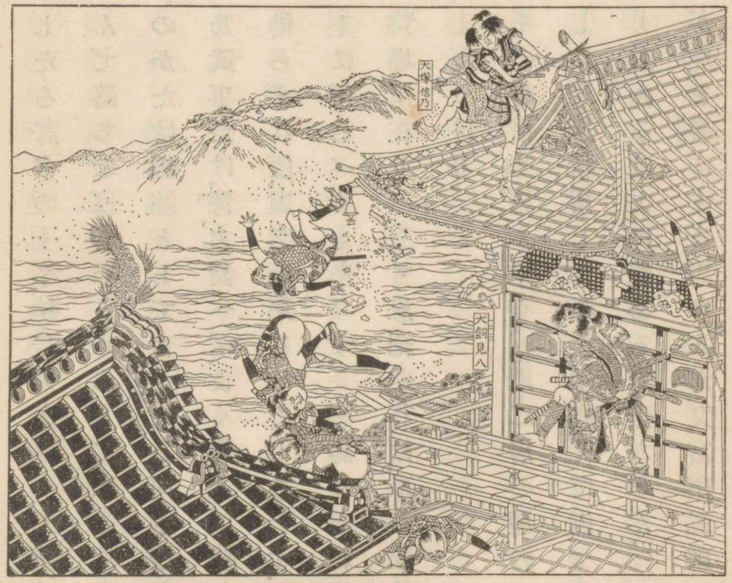
の面目に今更用ひられんこと願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ君命重く、彌高き彼の樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の餘熱をわたる敷瓦は凸凹隙なく波に似て、下には大河滔滔たるこゝ生死の海に入る流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫を絶えて、進退既に谷りし敵にしあれば、いかでわれ繫ぎとめんと鼈の樹傳ふ如くさら〳〵と登りはてたる三層の屋根にはまぶしさす由もなく、かたみに隙を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる有樣、浮圖の上なる鶴の巣を巨蛇の狙ふに似たりけり。廣庭には成氏朝臣・横堀史在村等の老黨・若黨、圍繞せし床几に尻を打掛けて、勝負いかにと見上げたり。亦只閣の東西には、腹卷

ユンヅエ

墨氏　墨翟　周代の人　宋に仕ふ
魯般　公輸般　周代の人　楚に仕ふ
膳臣巴提便　欽明天皇七年百濟に使したとき虎穴に入つて虎を刺殺す
富田三郎　和田義盛の士　源實朝の面前で長一米餘の大鹿角二箇を一度に折る

したる許多の士卒、鎗・長刀を晃かし、或は箭を負ひ、弓杖突立て、組んで落ちなば擊ちとめんとて、項を反らして之を觀る。加之外のかたは綿連として杳かなる河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも墨氏が飛鳶を借らざれば、虛空を翔るべくもあらず、魯般が雲の梯なければ地上に下るべくもあらず。渠、鳥ならねど羅に入りぬ、獸ならねど狩場に在り。三寸息絶ゆれば、事みな休まん。脫れ果てじと見えたりけり。

その時、信乃思ふやう、初層・二層の屋の上まで追ひのぼらんとせし兵等を斬落しつる後は絶えて近づく者もなきに、今唯一人登り來ぬるはよに覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便が虎を暴にする勇あるか、又富田三郎が鹿の角を裂く力あるか。



芳流閣上の奮鬪（南總里見八犬傳）

さもあらばあれ一個の敵なり、引組んで刺しちがへ、死するに難きことやある。よき敵ごさんなれ、目に物見せん」と、血刀を袴の稜もて推拭ひ、高瀬のごとき方桿に立つたるまゝに寄するを待てば、見八も亦思ふやう「かの犬塚が武藝勇悍固より萬夫無當の

敵なり。さりとても搦めかねて他の援を借ることあらば、獄舍の中よりこの役儀に擇み出されしかひもなし。搦め取るとも、擊たるとも勝負を一時に決せんものを」と思ひにければ、ちつとも擬議せず「御諚ざふ」と呼びかけて、持つたる十手をひらめかし、飛ぶが如くに方桿の左の方より進み登りて、組まんとすれど、寄せ附けず、心得たりと鋭き太刀風に擊つをはつしと受留めて、拂へば透かさず打こむ刀尖をさゝへて流す一上一下、辷る甍を踏留めて頻りに進む捕手の祕術、彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋をあちこち外す虚々實々、未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主從・士卒は手に汗握らざるもなく、瞬きもせず氣を籠めて見るめもいとゞはるかなり。

さる程に、犬塚信乃は侮り難き見八が武藝に、敵を得たりけりと

ソウゼン　セイタン　ハイゼン　ミジウ　ゴテ　アサデ　ツバギワ

思へば、勇氣いやましして刀尖より火出づるまで寄せては返す太刀音、かけ聲、兩虎深山に挑むとき、錚然として風發り、二龍青潭に戰ふ時、沛然として雲起るもかくぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなるいと高き閣の棟にして死を爭ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八が被籠の鎖、肱當の端を裏かくまでに切裂かれしかど、太刀を拔かず。信乃は刀の刃も續かで、初めに淺痍を負ひしより次第に疼みを覺ゆれども、足場を揣りて撓まず、去らず、疊みかけて擊つ太刀を見八右手に受流して、返す拳につけ入りつゝ、やつとかけたる聲と共に眉間を望みてはたと打つ十手を丁と受けとむる信乃が刄は、鍔際より折れて遙かに飛びうせつ。見八得たりとむずと組むを、そがまゝ左手に引着けてかたみに利腕しかと取り、捩ぢ倒さんと

エイゴエ　コウハイ　トモヅナ

長柄堤　今の大阪市西成區なる長柄川の堤

坪内逍遙　英文學者　戲曲作家　名は雄藏　早稲田大學名譽教授　文學博士　安政六年（一八五九）美濃國太田村の尾張代官所生

曳聲合はせて揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく踏辷らして河邊の方へころ〳〵と身をまろばしゝ覆車の俵坂より落すに異ならず。勾配けはしき棧閣に削りなしたる甍の勢、止るべくもあらざめれど、かたみに取つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らで、程もよし、水際に繫げる小舟の中へ打重なりつゝどうと落つれば、傾く舷と立つ浪にざんぶと音す水煙、纜ちようと張りきつて射る矢の如き早川の直中へ吐出されつ。しかも追風と退く潮に誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。（南總里見八犬傳）

二四　長柄堤の訣別

坪内逍遙

蘖を食ふことは難しと雖も、未だ如かず、生きて別るゝことの難かる

茨木　大阪府三島郡茨木町

伊豆守　石川貞政

には。苦きことは心肝にあり。晨雞再び鳴いて殘月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや分れゆく横雲や、殘んの星を一つづつ鐘が消しゆくいなのめの長柄堤に秋闌けて、一叢蘆に風黑く、有明凄き大川水、逝きて歸らぬ波の音、狹霧に咽び白けゆく千草が蔭の蟲の聲、哀はいとゞまさるらん。片桐市正（いちのかみ）且元は居城茨木へ立退かんと從ふ郎黨一百餘人、邸を立つて大阪城をあとになし列を正してしづしづと長柄堤に差懸る。其の時市正手綱をひかへ、從兵を先へ進ませ弟主膳正を呼び近づけ、あらためていひつくるやう。

「いかに弟、我昨日討手を待受け、自殺せんず覺悟なりしに、伊豆守が殘兵ぬけがけなし、討手の荒膽を挫ぎしため、備ありと見違へしか、また寄せ來らん模樣もなく、剩へ夜に入りては、外に在りし家の子まで、變を聞附け馳來り、血氣のともがらこれに氣を得て、薪に油を濺げる如く、弓鐵砲とひしめき騷ぎ、言附を聽かばこ

織田入道　織田信雄常眞入道

木村　長門守重成

そ、打棄ておかば珍事に及ばんも圖りがたく、暫く彼等をなだめん爲、一先茨木へ引退き、後事を圖らんとは言ひしものゝ、昨夜仄かに傳へ聞けば、織田入道も君を見限り、俄に京表へ退去の由、お家の危機いよ〳〵迫んぬ。今坪内道遙にも關東と隙を生じ、大事に至らんこと必定なり。それにつき所存あつて、先刻今村三右衛門を木村が邸へ走らせたり。追附け彼が吉左右あらん。我はこれにて相待つべし。御身は暫く我に代り、手勢を差配し、途中に不慮の間違なきやう一足先へ參らるべし」

と言葉のうち、遙かにしたひ駈けくる足音。

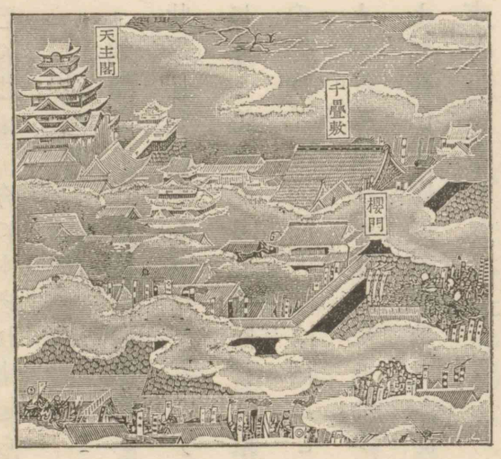
主「あの足音は、たしかに今村。」　市「三右衛門か。」　今「我が君これに御座ありしか、長門さまには追附けこれへ。」　市「ほゝ太儀々々、滿足なるぞよ。然らば主膳は一足先へ。三右衛門もこゝかまはず。我はこれにて相待つべし。」　主「仰ではござりますれど、油斷ならざる當節柄、如何なる變事あらんも知れず。」　今「只御一人此の處に、御座あらんは心元なし。」　主「せめて我々」　二人「兩人は。」　市「はて、入らぬ遠慮。氣づかひ致すな。往け〳〵。」　主「ぢやと申して。」　市「はて、往けと申すに。」　二人「はゝあ。」

顏見合せて是非なくも、主膳をさきに三右衛門、心殘して行過ぐる。後には何か一思案、寂然として駒立つる長柄堤の有明がた、塒に囀る小鳥の聲、川霧やう〳〵霽れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見え渡る賤が屋に一筋騰る朝煙、雞の聲勇ましく、生氣溢るゝ東の空に

南山不落
如二月之恒一如二日之升一如二南山之壽一不レ騫不レ崩（詩經）

加藤肥州
肥後守清正後水尾天皇慶長十六年（一六一一）薨年五十

は似ぬや入る方の月凄じき柳陰、枯葉枝疎らにして風飄々、見る目も昏し、遠方におぼろ〳〵と現るゝ名におほさかの四衢八街、悄然として寂しげに一棟高く聳えしは、



大阪城天守閣

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かれし大阪城、故殿下薨れさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ離れ、取分け加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬩げば、大政所

唇齒　唇亡齒寒（左傳）
須彌　梵語　妙高山と譯す　世界の中心に聳える最高の山といふ　Sumeru
千姫　徳川秀忠の女　秀頼の室となる
毘盧遮那佛　光明遍昭と譯す　大日如來　京都方廣寺の本尊　Vairocana
前門の虎　前門拒虎、後門進狼（諺）

の御方さへ當家を餘所にみそなはし、浮世離れし御有樣。唇齒已に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池も其の甲斐なく」。

いひかけて聲曇らせ、

市「須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か、情なや、此の且元がする事なす事いすかの嘴とくちがひ、兩家を繫ぐ絆にもと迎へ奉りし千姫君は東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも大慈大悲は宿らざるか。『御家とこしなへに康かれ。』と祝ひし文字が本となり、降つて涌いたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること御運の末といひながら」。

怺へず馬よりとびくだり、彼方に向ひ平伏なし、

市「是しかしながら、不肖且元、愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罠に罹り、仰せつけられし御遺命に背き奉る今日の仕合せ、不忠とも言ふ甲斐なしとも思召さん。それを思へば、且元が此の腸はちぎるゝばかり、償ひ難き不臣の罪はあの世で御詫仕らん。御赦しなされて下さりませ」。

在すが如く兩手をつき、人目なければ、やゝしばし不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

市「あゝ我ながら不覺の至。我が大罪の御詫よりも、差懸るお家の安危。長門守には如何にせし。心許なき事どもぢやなあ」。

すかしながむる折こそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音、程もあらせず只一騎、殘霧つんざき一散に汗馬に中を走り來る木村長門守重成、

長「市正殿に候な」。　市「長門守殿、待ちかねしぞ」。

いふ間にかけ寄るくつわづら、右手におり立ち顏見合はせ、言葉はな

御母公　秀頼の生母淀君名は茶々淺井長政の長女秀吉の側室

大野修理亮治長

渡邊内藏介糺

くてそゞろにもまづ袖濡るゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入りがたの月ゆらめきて、老いゆく秋の寂しさを長柄堤に留むらん。

長「最早豐臣の御社稷も愈〻末となつたるか。棟梁と頼む足下まで、佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。某圖らぬ事よりして端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のそのひまに思ひ懸けぬ珍變あり。續いて足下に御討手と昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿、日頃に似氣なく激論の末、席を蹴立て、只今退座ありしとばかり。あとは亂脈無法の評定、御母公の威を嵩にきる大野・渡邊等が我意暴慢。此の上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の欄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりし言ふ甲斐なさ。」

悔むを且元押宥め、

市「いしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢〻申しゝ如く、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあらじ。某とても此の度の一條、遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退去の事關東に聞え

長柄堤の訣別（劇）

なば、破綻生ぜんこと治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆水泡。大亂破裂せんは目前なり。この上は只偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。」長「して、籠城の計畫とは何を以て先とすべきか。」市「されば、今御城に兵糧・金銀は乏しからず。まつた猛將勇卒にも事闕かねど、得難きは智謀の將なり。某之を慮り、萬一の備をなし置きたり。」長「して其の智謀の將とは。」市「いま九度山に隱れ忍ぶ信州上田前の城主眞田安房守が次男左衛門佐幸村こそ故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、關が原の一戰以來關東の跋扈を怒り、蟄して世の態を窺へるを先年御味方となし置いたり。事起らば、上使を以て急ぎ彼を招かるべし。合戰の進退は一切彼の人に任せられよ。其の他關が

九度山　和歌山縣伊都郡九度山町高野山の北麓
眞田安房守　名は幸昌

原の一亂以後浪々なせし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衛基次、何れも得易からぬ良將なるが、豫て因みは附け置きたり。上、御使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。是、第一の手配りなり。」長「して又籠城となつたる曉、敵を防がん手配りは。」市「その儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木數多伐出させ、商業の爲といつはり、紀州川の川上より浪華津に押流させ、御船入に積み置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るといふとも、なほ支ふるに餘りあるべし。」長「それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、尚若干の餘財あり。」市「甲冑・兵具も乏しからず。」長「城は名に負ふ南山不落。」市「眞田・後藤の智勇をもて、此の堅城

速水　名は守久
御宿　名は正倫
和久　名は宗是

金石も亦透り
陽氣發處金石亦透、精神一到何事不レ成。（宋の朱熹）

社鼠
君亦見二夫爲レ社者一乎。樹レ木塗レ之。鼠穿二其間一掘レ穴託二其中一。煙レ之則恐レ焚レ木灌レ之恐二塗地一此社鼠之所二以不一レ得也（韓非子）

に立て籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、」

長「たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ、諸大名を懷け、六十餘州の兵を盡くし、四方八面より攻寄すとも、」　市「なか〳〵三年四年が程には攻落さんこと難かるべし。」　長「まつた若年には候へども、愈〻軍始りなば、我亦一方を承り、速水・御宿・和久等と共に忠義を金鐵の堅きに比し、命は固より鴻毛の、吹き飜さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣・將士心を一にし、千變萬化の手を盡くさば、金石も亦透りぬべし、利欲に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に從ひ、この事君に言上なし、直ちに軍の手配りせん。御心安かれ、市正どの。」　市「ほゝ頼しゝ〳〵。只大切は上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら、往時に照らし、成行く末をかんがみれば、」　長「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野・渡邊。」

市「上御發明に渡らせらるれど、」　長「讒佞之を蔽ふが故、」　市「地の利はあれども人の和なく、」　長「故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏せし六十餘州の民草も、」　市「天の時にや、大御所のおのづからなる德風にいつしか靡く世の有樣。」　長「如何なれば、かくまでに、御運かたぶく西天の、」　市「有明の影薄れつゝ、」　長「東天紅と八面に、かしましく鳴く雞は、」　市「新日、東天に昇るといふ、」　長「世の成行の」　兩人「影なるか。」

是非もなき世の有樣と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴におちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの〳〵と明けにけり。市正おもてを正し、

長「萬一にも其の期に至り、百計合期せずば、それまでなり。當來を誰かは知らん。斃れて後已まんのみ。大丈夫、豈徒に杞憂せ

んや。後事を足下に託せし上はもはや思ひ殘す事もなし。長「して、足下にはこれよりして、」市「居城茨木へ一先立越え、」長「といはるゝは請取りがたし。若しもやこれが今生の、」市「あゝいや、潔き最期をだに遂ぐべき機會を失ひし市正が命の拙さ、御詫の名こそ立ため、償ひ難き身の大罪。此の身一つをとやかくと、千筋に迷ふ心の中。いやなに、心ばかりは此の後とても、君の御影に附添ひまゐらせ、萬一にも杞憂的中なし、大事去りなん其の時には、」長「某とても事敗れて、御運の末となる時は、此の世の思出、奉公納め、關東勢が眞中に、縱横無盡の血戰なし、花々しく討死なさん。」市「おゝ勇ましゝ、潔し。某存へ、世にあらば、其の目ざましき働をば、餘所ながら見物なさん。尙再會は黃泉にて。まづそれまでは長門殿。」長「さやうござらば市正殿。」市「隨分堅固で。」

白倉權六　大野修理亮の家の子
十河　十河十兵衞
本村　本村清藏　共に片桐市正の郎黨
月毛　淡桃色

長「そこもとにも。」

惜しきが中の生別離、まことや之に比ぶれば、檗は蜜にや似たるらん。

右と左に立別れ駒引寄せて色代や、悵然たる重成が、乘移りざまふりかへる堤下に一もとくねり松、あやしの人影「すは曲者」と見る間も疾しや打出す手裏劍。あつとたまぎる聲諸共、ねらひはそれし種が島。どうと大地に白倉權六、

白「且元覺悟。」

と拔きうちの、襟がみつかみ頭顚倒。音聞きつけて物かげより、驚き駈來る十河・本村。郎黨ども、見返りもせず乘移る秋さび月毛乘る人の心やいかに白駒の勇むを制する片手綱、引戻さるゝ後髪。

兩人「さらば。」「さらば。」

と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇る、おぼろ〳〵。嘶く駒の聲はして、別れ行く兩人が此の世に殘す面影は、また見ぬ形とぞなりにける。

（逍遙選集――桐一葉）

カンノンサマ
ショウジン
ケッサイ
セッシヤ
シユコウ
ケヨウダイ

妹　吉田松陰の長妹千代子で兒玉兵衛門に嫁した
この文は安政六年四月十三日松陰が萩の野山の獄中から贈つたもの
吉田松陰　勤王家教育家名は矩方通稱は寅次郎長門藩士安政六年(一八五九)刑死年三十
靈神様　吉田家祖先の靈を祭れるもの

二五　妹にさとす

吉田松陰

この間は御文下され、觀音様の御洗米、三日のうち、精進にて戴き候やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進、潔齋などは、隨分心のかたまり候ものにてよろしき事と存候につき、拙者も二月二十五日より三月晦日まで少々志の候へば、酒肴ども一向たべ申さず候。その間、一度靈神様御祭のもの頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にもこれなく、御深切の事に候へば相果したく存候へども、當所にては、當りまへの精進の外にまた精進と申候へば、連中又は番人ども何故と怪しみ尋ね候につき、それをそれと相答へ候事面倒に存候故、八日より幸ひ

シンコウ
イサイ
ホッケキョウ
ジョウ
カギ

ちんぢ　方言で微塵などの意　ちゞの訛か
江戸の人屋　安政元年(一八五四)三月下田の米艦に便乘して米國に遊ばうとしたが成らず四月江戸の獄に繫がれた

精進日なれば、その日一日に戴き申候。抑、觀音信仰せよとの事は定めし禍をよけ候ためにあるべく、これには大きに論のある事に候へば、委細申進ずべく候。法華經第二十五の卷普門品と申す篇に觀音力と申す事悉く高大に述べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候へば、繩目にかゝり候へば忽ちぶつ〳〵と繩が切れ、人屋に捕はれ候へば忽ち錠・鍵がはづれ、首の座へ直り候へば忽ち刀がちんぢに折るゝなど申してこれあり候。これは拙者江戸の人屋に

吉田松陰　（松浦松洞畫吉田家藏）

てこの經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれよりありがたき事はなしとて信仰するも無理はなく候。

さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘・小乘と二つに分ちて、小乘は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乘にて申候へば觀音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰さするに御座候。これは人に信を起さするためなり。信を起すとは一心に有難い事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なきことにて、一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりさへすれば、何事に臨み候うてもちつとも頓着はなく、繩目も人屋も首の座も平氣になれ候から、世の中に如何に難題・苦患の候うても、それに退轉して不忠・不孝・無禮・無道等仕る氣遣ひはなし。されど初めから凡夫に、一心不亂ぢやの不退轉ぢやのと申し聞かせても、さつぱり耳に入らぬもの故に、假に觀音様を拵へて人の信を起させ候教に御座候。之を方便とも申候。これにつきて、法華經に都上りの喩これあり、至極面白く候へども、事長ければ略し候。

筆蹟

一士道莫大於義義因勇行勇因義長

一士行以質實不欺爲要以巧詐文過爲恥光明正大皆由是出

一成德達材師恩友益居多焉故君子愼交遊

一死而後已四字言簡而義該堅忍果決確乎不可拔者舍是無術也

吉田松陰筆士規七則（松下村塾藏）

一士道莫大於義。義因勇行、勇因義長。

一士行、以質實不欺爲要、以巧詐文過爲恥。光明正大皆由是出。

一成德達材師恩友益居多焉。故君子愼交遊。

一死而後已四字、言簡而義該。堅忍果決確乎不可拔者、舍是無術也。

二十一回猛士手錄

都上り

法華經第七化城喩品にある

シヤカ

天竺王　迦毘羅城主淨飯王

さてまた大乘と申す方にては出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申候うても、立身出世など申す事には御座なく候。その初めは、釋迦が天竺王の若殿に候處、若き時から感の強き人にて、老人を見ては我が身も往くさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては我が身も往くさきは死なうかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲しみを起し、生老病死がこの世の習なれば是非にこの世を出ねばすまぬと志を立て、年二十五の時位を棄てゝ山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。（これにも色色有難き話があれども事長ければ略す。）さ候うて三十出山とて、僅か五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出て來て、それから世の人を教化せ

サイセイ

シヤウコ

人間萬事塞翁が馬　淮南子にある話

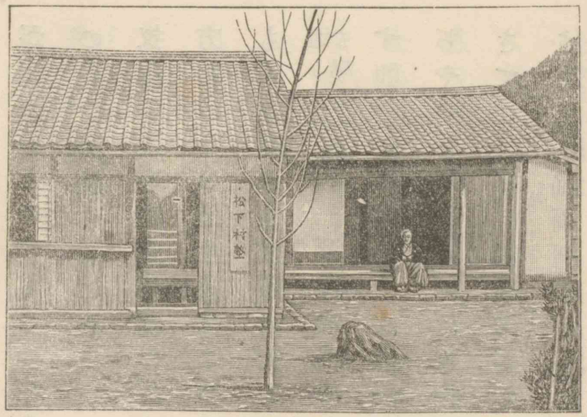
られたり。これが卽ち出世法なり。故に出世せねば濟世が出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、卽ちこの世の人を濟度することに御座候。

扨その死なぬと申すは、近く申さば釋迦の孔子のと申す御方々は、今日迄生きてござる故、人が尊みもすれば有難がりもする、畏れもする。果して死なぬに候はずや。（孔子の教もやはりこの通りに候へども事長し、略す。）死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成ぢやの大石良雄ぢやのと申す人々は刄物に身を失はれ候へども、今以て生きてござる。卽ち刀がちんぢに折れたる證據なり。

さてまた、「禍福繩の如し。」といふ事を御悟なるが宜しく候。禍は福の種、福が禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。

ショセン

圖解
圖中緣がはに腰をかけてゐるのは松陰の兄杉民治



松下村塾

（このわけは物知に問うて知るべし。）拙者など人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなるものに候へども、また一方には學問も出來、己のため、人のため、後の世にも殘り、かつ〳〵死なぬ人々の仲間入も出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出で候へば、又如何なる禍の來んも知れ申さず候。勿論、その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の間難儀さへすれば、先の福があるなり、何の

コウケン

マンエイ

ヨウセツ

オシ

易の道
天道虧レ盈而益レ謙

七人兄弟
杉民治
吉田寅次郎
杉千代子
兒玉兵衛門妻
杉壽子
小田村素太郎妻
杉艶子
杉美和子
久坂義助妻
杉敏三郎

ふざま
方言で運の意

かるうた
方言で引受けたの意

効驗もなき事に、觀音に頼みて福を求むるやうの事は、必ず必ず無益に存候。

尤も右の通り申候へば身勝手なる申分、不孝なる申分とも御存があらう。こゝにまた論あり。易の道は滿盈と申すことを大いにきらふなり。御互に七人兄弟、拙者は罪人、艶は夭折、敏は啞子、ふざまのわるきやうなるものなれど、又あと四人は何れも可なりに世を渡られ、特に兄樣そもじ・小田村は兩人づつも子供があれば不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家を見くらべよ。是程にも參らぬ家は多きもの。近くはそもじの家にても、高須などにても、兄弟の内にはふざまのわるき人も隨分あるなり。然れば父母兄弟の代りに拙者・艶・敏の三人が禍をかるうたと御思ひ

ロウシ

五節句、人日（一月七日）上巳（三月三日）端午（五月五日）七夕（七月七日）重陽（九月九日）

タンゴ
ケイユ

山宅　松陰の實父杉常道隱棲の地萩城の東方護國山の麓に在つた

候へば、父母の御心も濟む譯には候はずや。

且杉は隨分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却て杉が氣遣ひなるものならずや。拙者身の上は前に申す通り、つめが。牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は隨分あるが、杉は今にては御父子御役にて何も不足のない中なれば、子供等がいつもこの樣なるものと思うて、昔山宅にて父樣・母樣の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても眞とは思はぬ程なれば、この先、五十年・七十年の事をとくと手を組んで案じて見やれ、氣遣ひなる者にては候はずや。去年も。端午の客の多きを人はめでたいめでたいと嬉しき顏すれど、拙者は何分先の先が氣遣ひにてたまらぬゆゑ、始終。稽古場に屈んで、人の知らぬ處にては獨り落涙したる程の

オイ
メイ
カンヨウ

小太郎　兄民治の子

事なりき。もしや、萬一、小太郎にても父祖に似ぬやうなる事があつたらば、杉の家も危し〳〵。父母の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。小田村でさへ山宅の事はよくは覺えて居るまじ。まして久坂なんどは猶以てのこと。されば拙者の氣遣ひに觀音樣を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に「樂が苦の種、福は禍の本」と申す事をとくと申して聞かする方が。肝要なり。

なほまた一つ、拙者不孝ながら孝に當る事あり。兄弟內に一人にてもふざまのわるき人あれば、あとの兄弟は自然と心が和ぎて孝行にてもするやうになる、兄弟も睦まじくなるものなり。これからは、拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受合ふから、兄弟中は拙者の代りに父母に孝行してくる

カンベン
シンコウ

るがよし。左樣あれば、つゞまるところ兄弟中皆よくなりて、はては父母の御仕合せ、また子供が見習ひ候へば、子孫のためこれ程めでたき事はなきにあらずや。よく〳〵御勸辨候うて、小田村・久坂なんどにもこの文御見せ、佛法信仰はよき事なれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと、をり〳〵御見候へかし。心學本に、

のどけさよねがひなき身の神詣で

神へ願ふよりは身に行ふが宜しく候。（松陰先生遺著――俗簡襍輯）

嘉納治五郎
教育家
東京高等師範學校名譽教授
講道館柔道師範
貴族院議員
萬延元年（一八六〇）攝津西灘生

二六　偉人

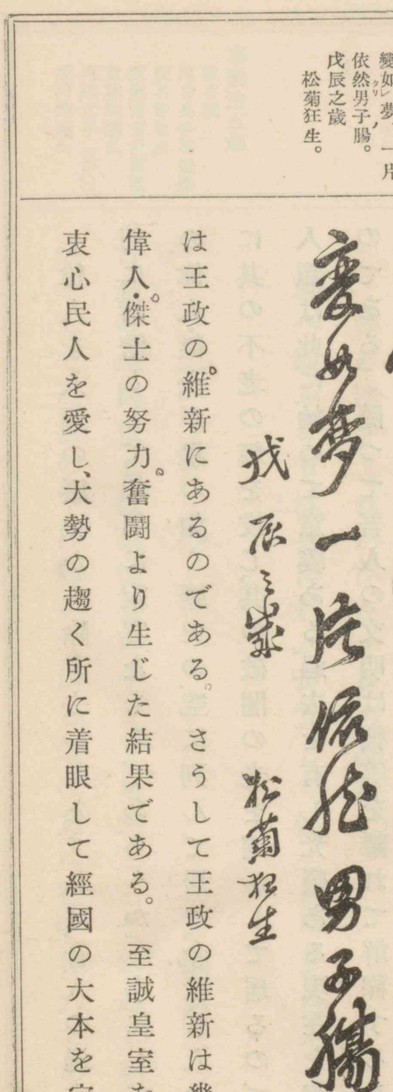
嘉納治五郎

古來の生民蓋し幾萬億、其の中より卓然として崛起し、功業德澤炳として萬世の下に輝いて居る者は、實に彼等偉人である。若し偉人を人類の歷史から除き去つたとすれば、吾人の過去は如何に暗澹として如何に寂寞なものであらうか。幸にして幾多の偉人・傑士が星の如く歷史の空に列んで居て、今猶吾人の心中に其の不老の輝を投じ、其の破闇の光を耀かして居るので、吾人人類は此に始めて意義ある過去を有し、光榮ある現在を有するのである。隨つて吾人の文明は彼等を離れて解釋することは出來ない。吾人の經營しつゝある事業は、彼等の遺業を繼紹して之に新發展を加へんとするに外ならぬのである。古語に「大上は德を立て、其の次は功を立て、其の次は言を立つ。」と云つてあるが、德にもあれ功にもあれ言にもあれ彼等が人類に及した影響は不朽不滅である。凡そ世の中に壯快といへば、偉人の事業より壯快なものはなく、崇高といへば、偉人の人格より崇高なも

大上は
大上有レ立レ德、其次有レ立レ功、其次有レ立レ言、雖レ久不レ廢。此之謂二不朽一。（左傳）

のはないのである。

試に思へ。我が國が明治の御代になつてから長足の進歩を爲し、世界の奇蹟とまで稱せらるゝに至つたのも、其の直接の原因は王政の維新にあるのである。さうして王政の維新は幾多の偉人、傑士の努力、奮闘より生じた結果である。至誠皇室を尊び、衷心民人を愛し、大勢の趨く所に着眼して經國の大本を定め、謀



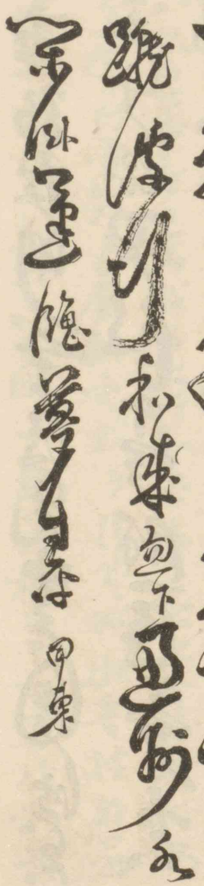
筆蹟

去歳千軍逼我疆、朝孤劍入他鄉。浮生萬事變如夢、一片依然男子腸。

戊辰之歳　松菊狂生。

木戸孝允筆蹟（末松謙澄藏）

慮深遠、規畫周密、大いに皇猷を賛したのは、彼の木戸松菊であつた。高く自ら任じ、篤く自ら信じ、沈毅端嚴、善く謀り善く斷じ、時局の紛難を處理すること、快刀の亂麻を斷つが如く、凛々たる英風、よく上下の信頼を得て國家の柱石となつたのは、彼の大久保甲東であつた。光明磊落、規模宏遠、安危利害の上に超脱して泰然として動かず、曠懐偉度、清濁併せ呑み、赤心を人の腹中に置いて疑はず、談笑して天下の勢を制し、國家を磐石の安きに置いた



筆蹟

奉勅單航向北京、黑烟堆裏蹴波行。和成忽下通州水、閑臥篷聽一夢自平。

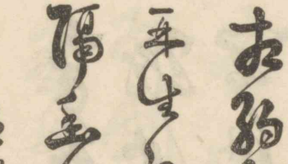
甲東。

大久保利通筆蹟（得能通昌藏）

筆蹟

相約投ゼレ淵無ニ後先一、豈圖波上再生緣。回頭十有餘年夢、空隔ニ幽明一哭ニ墓前一。月照和尚忌日賦　南洲。

のは、彼の西郷南洲であつた。木戸の識、大久保の斷、西郷の量、三者相俟つて此に天地を旋轉するやうな大業が成就せられたのであつて、世に維新の三傑と稱するも亦偶然でないのである。

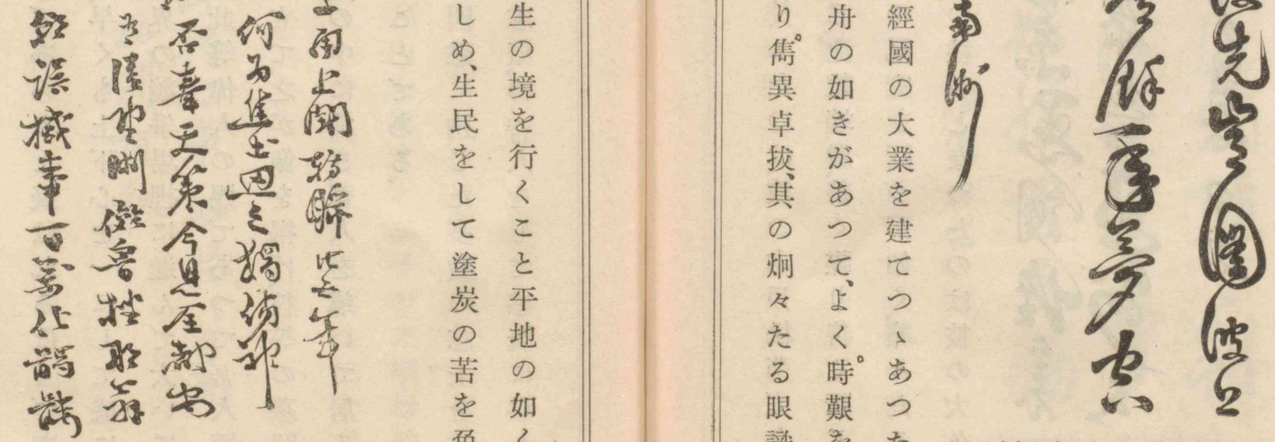


西郷隆盛筆蹟　（西郷隆盛記念碑所刻）

當時彼等三傑が同心戮力して經國の大業を建てつゝあつた時に、他の一面に於ては、奇傑勝海舟の如きがあつて、よく時艱を濟つたのであつた。海舟人となり、雋異卓拔、其の炯々たる眼識は

筆蹟

戊辰進擊日、三月十五天。蝸牛角上鬪、轉瞬廿五年。皇國一大府、此中無辜民。如何爲ニ焦土一、思レ之獨傷レ神。八萬幕府士、罵レ我爲ニ大奸一知否奉天策、今見全都安。參軍勿レ嗜レ殺、嗜レ殺殺全都空。我有ニ清野術一、倣ヲ魯捏ニ那翁一。官兵過レ城日、知レ我唯南洲。一朝課ニ機事一、百萬化ニ髑髏一。壬辰初夏。海舟勝安芳。



勝安芳筆蹟　（觀大觀畫書）

よく時局を大觀し、機略縱横、死生の境を行くこと平地の如く、終に幕府をして恭順の實を擧げしめ、生民をして塗炭の苦を免れしめたのであつた。

維新前後は我が偉大なる國民精神の最も著しく發揮せられた時で、偉人・傑士の風雲に乘じて起つたものは甚だ多かつたので

あるが、就中、海舟・南洲の如きは、高山峻嶽の巍々として雲表に聳ゆるが如く、嶄然として頭角を現したものであつて、若し此等の人がなかつたならば、維新回天の事業もかく速に圓滿なる成功を告げることが出來なかつたであらうと疑はれるほどである。我が國民が明治の初年に於て、早くも上下心を一にして盛に經綸を行ふといふ國是に從ひ、世界の競爭場裡に進んで大いに國勢を張ることを得たのは、實に此等偉人の賜であつて、吾人國民が景慕の情を傾けて、之が傳を立て、之が像を掲げ、彼等の墓門既に苔むせる今日、彼等が猶吾人の中に活き、吾人を導いて居るやうに思はれるのも意味のあることである。

猶吾人が想を馳せて維新前に國難に殉じた多數の志士を追懷すると、其の奉公の赤誠、敢爲の志氣、轉々吾人をして感慨に堪へざ

筆蹟

有感

遺却功名萬念休、渾將心事附悠悠、
故舊沈淪悽短笛、清砧別有秋。

らしむるが中にも、吉田松陰・橋本景岳の如きは、最も強く吾人の注意を惹くのである。西郷南洲は常に「余は先輩に於ては藤田東湖に服し、同輩に於ては橋本左内を推す。二子の才學・器識はとても吾が輩の及ぶ所でない。」といつた。時に南洲は三十歳、景

有感

遺却功名萬念休渾將心事附悠悠
故旧沈淪悽短笛清砧別有秋

橋本左内筆蹟
（維新志士遺芳帖）

岳は二十三歳の齡であつたことを思ふと、景岳は我が國の青年偉人中に最も卓越せる者といはねばならぬ。かれ叡智靈覺涌くが如く、早くも國家の大計に着眼し、一青年の身を以て、政界の大波瀾の中に手腕を試みたのであつた。彼は不幸にして二十

身を殺して

子曰、志士仁人、無二求レ生以害一レ仁、有二殺レ身以成一レ仁。（論語）

五人の大臣

伊藤博文
山縣有朋
山田顯義
品川彌二郎
野村靖

六歳を一期として刑場の露と消えたけれども、彼の志は南洲等の知己に依つて成就せられた。吉田松陰も三十歳の短生涯を以て非命の死を遂げたけれども、彼の人格は永久に國士の典型として青史を照らして居る。忠愛の至誠、英發の志氣、大義の存する所は水火をも避けず、身を殺して仁をなすといふ志士の本領は、彼に於て最もよく見ることが出來る。彼が一小私塾の教育に盡くした熱誠は、幾多の志士を輩出して王政維新の急先鋒とならしめ、明治の御代になつてからも五人の大臣を出した位であつた。吾人は松陰・景岳に依つて英偉なる人物が少壯期に於て既にかくも貴き事を成し得るを知ると共に感歎の情に堪へないのである。

かく吾人は明治昭代の起因を尋ねて、幾多の偉人に景仰の情を

筆蹟

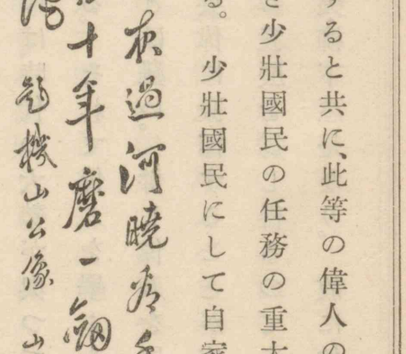
顎聲蕭々夜過レ河曉有千軍擁二大牙一遺恨十年磨二劍一流星光底失二長蛇一

題二機山公像一　山陽外史

逝者

子在二川上一曰逝者如レ斯夫、不レ舍二晝夜一（論語）

傾け、感謝の意を表すると共に、此等の偉人の後を受けて我が國の將來を經營すべき少壯國民の任務の重大なるに想ひ到らざるを得ないのである。少壯國民にして自家の任務の重大なるを知る者は、又よく此等の偉人を學んで其の先蹤を繼ぐことを務めねばならぬ。



賴山陽は十四歳の少時に、

十有三春秋、逝者已如水。天地無始終、人生有生死。
安得類古人、千載列青史。

と歌つた。古來の偉人が少年青年の時よりして漸く發達した經路を尋ねると、多くは前代の偉人を景仰して、感憤興起したの

に基づいて居るのである。偉人を景仰するのは青年自然の情であつて、此の情の生ぜぬものは、其の志多くは低劣で、其の行亦多くは鄙陋である。吾人は前偉人に活理想を求めて、此に志氣を振ふことが出來るのである。志氣が振つて、此に向上發展の途に就くのである。

固より、古來偉人の人格には、おのづからにして卓越したものもある。偉人の事業には、時代の大勢が與つて其の背後の力となつて居るものもある。それで偉人を學ぶものが、誰も皆偉人となり得るといふことは難い。併し偉人を學ぶことに依つて、天才ある者は益〻之を英偉に發揮することが出來、凡庸なものも其の人として最高度の發展を爲し得るのである。孟子は「聖人は百世の師なり。伯夷・柳下惠是なり。故に伯夷の風を聞く者は、

聖人は百世の師

孟子曰、聖人百世之師也。伯夷柳下惠是也。故聞二伯夷之風一者頑夫廉懦夫有レ立レ志。聞二柳下惠之風一者薄夫敦鄙夫寛。奮二乎百世之上一、百世之下聞者莫レ不二興起一也。非二聖人一而能若レ是乎。而況於下親二炙之一者上乎。（孟子）

頑夫も廉に、懦夫も志を立つるあり。柳下惠の風を聞く者は、薄夫も敦く鄙夫も寛なり。百世の上に奮ひ、百世の下、聞く者興起せざるなし」といつた。偉人を學ぶべき者は、獨り偉人には限らない、懦夫も鄙夫も、皆偉人に依つて鼓舞せられ、激勵せられ、感化せられ、指導せられ、以て向上の生活に進むのである。

且古來凡庸を以て嘲られ、微賤を以て輕んぜられたものが、他日巍々として衆目を驚かすやうな發展を爲し得た事が少からず史上に存するのを思ふと、今日不幸な境遇に生活し、凡庸愚劣と評せられて居るものも、決して失望自棄するを要しないのである。前に列擧した維新前後の六偉人の如きも、何れも皆微祿の士であつた。南洲特に海舟の如きは眞に赤貧洗ふが如きものであつた。松陰・景岳の如きは、生來虛弱多病であつた。南洲の

我も人なり

成覸謂二齊景公一曰、彼丈夫也、我丈夫也、吾何畏レ彼哉。（孟子）

王侯將相

壯士不レ死即已。死即舉二大名一耳。王侯將相寧有レ種乎。（史記）

顏淵

顏淵曰。舜何人也、予何人也。有レ爲者亦若レ是。（孟子）

如きは少時極めて魯鈍といはれたものである。松菊・甲東の如きも、少時は意氣の壯なのみで、特に英才の煥發したわけではなかつた。若し彼等が精勵刻苦して勳功を建つるに及ばず、不幸にして夭折したならば、青年偉人として後世に傳へらるべきことは何もなかつたであらう。此等のことを思ふと、「我も人なり、彼も人なり」といふ思想は、決して僭越狂妄として排斥すべきではない。「王侯將相寧種あらんや」といひ、「英俊とは凡常の士の發憤勉勵したるものゝみ」といつたのも無理ではない。顏淵は「舜何人ぞ、予何人ぞ」といつた。有爲の士の志を立つることは常に此の如きものである。

今や我が國は世界の日本として大活動・大發展を爲すべき時に臨んでゐる。公私各般の事業に於て英偉なる人物を要するこ

とが甚だ急なのである。今日の多數青年の中、誰かよく前英に繼ぎ、來者に先だつて大業をなすであらうか。偉人を師として奮起するは終生の最大快事であつて、假令運命は其の人をして偉人の名を成さしむるに至らずとも、我として最高の發展を爲し遂ぐることを得たならば、人生の目的は此に達せられたと謂ふべきではあるまいか。（青年修養訓）

師範國文 第一部用 卷三終

文部省檢定濟
昭和六年二月四日　師範學校國語科教科用

大正十四年十月廿七日印刷
大正十四年十月三十日發行
大正十五年三月十三日修正再版發行
昭和五年八月三十一日修正三版發行
昭和六年一月二十五日修正四版印刷
昭和六年一月二十八日修正四版發行

著作權所有

編者　吉田彌平
發行者　東京市神田區通神保町六番地　上原才一郎
發行所　東京市神田區通神保町六番地　光風館書店
（電話麹神田三〇八七番）
（振替口座東京三二七番）
印刷者　東京市神田區通神保町六番地　山崎與吉

定價
卷一　金六十九錢
卷二　金六十七錢
卷三　金六十三錢
卷四、五、六、七、八　金六十一錢
卷九、十　金四十九錢

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

學校印
任之印
山口縣師範學校
本科第二學年ノ部
宮田利雄

檢
年 月 日
學年
組

庫
1
86
広島大学図書
2000039186